

## 翻刻『板倉政要後編』(下)

### 卷八、卷十五

大久保 順 子

#### 板倉政要後偏卷之八

##### 目録

- 一 秤に掛て煎餅の負数を知る事
- 一 五年待たせ婚礼を極む事
- 一 即座に米盗人を顕す事
- 一 継母の欲は箇の一腰の事
- 一 明智旅人を殺し金を取る宿を顕す事
- 一 無実を通る即座の分別の事

(31オ)  
(31ウ)

#### 板倉政要後偏卷之八

##### 秤に掛て煎餅の負数を知る事

(八の二)

昔し都の町に出て花せんへいをうるもの有けるか四辻の所

にて風と行あたり其器を打こほさせせんへい悉くくたけければ互に論する内に行當りたるもの争ひまけてつくろいわきまへるに極りたる時大方五拾枚程なるべしとて其ついへを出しける相手の方よりは慥に三百枚有りし也と言て又互に争論果てさりければ兎角下にては濟ましと彼のくたけたるせんへいを持ち奉行所へ訴出ける奉行<sup>32オ</sup>捌かれけるは此負数知らんは尤安き事なりといそき菓子屋へ人を遣はし花せんへい壱枚かわせ其重を秤にかけていか程重きといふことを知り扱右のくたけたる煎餅を取集め秤にかけて何枚のおもみ也と積らるゝに五拾枚のおもさありけるとかやさてせんへいური申かけ顯れけり

評にいわく両方より行當りて打わりたる煎餅なれば少しの不足いたしても苦しかるましきに大分のまけ致す

事言語同断不届ものと御しかりのあげくの事なれば両損になりしとかやさすかの奉行程あつて秤に<sup>(32ウ)</sup>掛し思召付天晴御智恵哉と世人是を誉しとかや

五年待たせ婚禮を極む事

(八の二)

昔し都の町に後家酒屋ありしか獨の娘を持けるか其姿うつくしく殊に手前よき酒屋なれば暦<sup>レ</sup>の子共聳に取らんと願ふ中に此娘いと云なつけの事なれば婚禮ならんと云此者昔は身の上よき商人なりしか段々不仕合にて獨暮らす古着うりなりしか段々まつしく此男かの娘をいところから夫婦となる約速<sup>レ</sup>娘父かたく極め置ける所後家欲心おこり古着屋まつしくなりしをきらひ娘をくれ間敷と言へは古<sup>33オ</sup>着屋合点せず伯父のいきかひの内かたく貰ふ約速<sup>レ</sup>なれば是非に妻とすへしと互に争ひ内證にて濟しかたく此事御前へ御願申上し故双方召出され詮議のうへ後家を召出され汝いかなれば父親かたく彼ものを聳に極め置所今さら約速<sup>レ</sup>を違ひ聳となす間敷とはいふそと仰ければ後家かしこまり申けるは父親私にも知らせず彼ものは現在の甥にて御座候故後々には夫婦に致すへき約速<sup>レ</sup>仕候由御覽の通り私娘は當年わつか十五歳に罷成あの男ははや三拾五に罷成候年廿違ひの男耄人の娘にもたせ申事何とも不便に御座候ゆへ父の約速<sup>レ</sup>を変し申て全く彼もの身<sup>33ウ</sup>貧になり候ゆへきらひ申にて

は御座なく責て一倍の違いにて御座候は、聳に仕へく候へとも一倍の余ちかひ申候年寄聳にて候間此儀御免被下候は、有難くぞんじ奉るへし由申上る奉行しばし思案ありて後家の申所尤なり然らは年一倍違ひならは聳と致すへきやと重而御意被遊ければ後家承りなる程一倍の違いに御座候は、随分聳と致すへく候得共右の仕合に御座候間此段聞し召分られ御免下さるべしとありけるその時奉行男を召されさあらは其方今五年相待聳となるへし五年またば其方は四拾娘は廿とならば後家か望の所一倍年違ひたる<sup>34オ</sup>聳そかしと所の名主五人組を召し双方五年の内かたく脇より縁組いたさせましき由仰渡され何れも御前を罷立けり

評に曰後家の愚なる智恵にて言まわし貧なる聳なればわかつれ合の現在の甥をきらひ夫の遺言を背き外より手前よろしきものを聳に取らんとたくみしか奉行の智は誠に以てわかち玉へは何程の弁舌よく申上るとも善悪は眼前に知るゝなり定て互に五年は待兼終に濟むへしと皆人言けり

即座に米盗人を顕す事

(34ウ) (八の三)

昔し都の近き里の百姓の庭につみ置たる米を盗まれ訴訟しける奉行此よしを聞玉ひ是は定て近き所のもの盗たる成べしとてあたり近き疑かわしきものともを数人召出し何れも

白砂になみ居たり何と詮議し給ふかと思ふに一向に米盗人の争は曾て言出し玉はす世間のうわさ四方山の争ともを色々問かけ返答させ悉く氣をゆるめさせて俄にひとつと高聲をあけ夫れくあれに米盗人よあれしばれと手を出し給へはその中に獨り色違ひたるものあり此ものを見付置き良ありてまた急き彼をからめ取れと仰せければ弥くかのもの<sup>(35オ)</sup>色替りはいもふしける故終に其ものをとらへ拷問しければ紛れなき米盗人なりけるとぞ知れて牢舎致しける

評に曰是すなわち色を以て察するの知なり惣して公事をさばくは五つの察し様あり偽りあるものは必言葉のちがひ顔の色うろたへ息つかひ荒し耳きこへぬ上眼みへさるものなりこの五察共に分明ならは誠にいつわりを知る事鏡の照らすかことし爰を以て見るに今奉行何れにも氣をゆるさせひよつと米盗人かと聲をかけ給ふ事實にも深き御心かなと諸人<sup>(35ウ)</sup>こそぞつて称美いたしける世に賢しき人あまた有といへともかくのこく明智なる廣き唐しにもたぐひまれなる智仁勇三徳かね給ひし器量中く凡人の申すもおろかなる事共なり

#### 継母の欲は箇の一腰の事

(八の四)

むかし都の町に質屋の何某とて富るものありしか病死して跡は惣領の男子家續仕る所に當年三拾七歳になる継母と不

断中惡しければ手代と言合て追出し跡は継母の甥を他所より呼よせ跡を継せんといふにより此惣領合点せず奉行所へ此よし願ひ申けるより<sup>(36オ)</sup>則御聞届後家を召寄られ御尋ありけるは何故一子に紛もなき者を差置外より家を継せんとはいふそと仰ければ後家承りて申候はあのもの行跡あしく第一私に不孝に御座候其上商賈に油断仕候ゆへ一先其身修行後覺のため江戸長崎へも罷越へし元手少く遣すへしと申候得共合点仕らす我まゝを申あまつさへ御前迄私を呼出し申程の不届ものに御座候間御慈悲に此儀聞召し分られ下され候は有かたく奉存へしと申上る其時忤こらへかね罷出て申上るは何共母の申上候儀合点参らす私儀父の数年仕来りし家業油断なく相勤其うへ母へ不孝に仕りたる覚御座なく候へ共<sup>(36ウ)</sup>様く難だいを申かけ私をうるさく存し候様に相見へ候得は自然毒害いたすへきも存せず右の仕合に御座候此段御聞届遊され父の名跡つゝかなく私相續仕候様に仰付られ下さるへくよし申上る奉行双方聞し召れ後家に仰付られしは其方夫相果し上はあのものに名跡をつかせ汝うしろみかたくして家を相續すへき所にさはなくして獨りの男子を他国させんと言不同心ならは勘當せん抔といふは第一死たる夫へ不義なる仕方なり殊更相應の家業あるを差置継子に流浪をすゝむるに似たり向後左様なる心底を改め親子むつましく跡式相續仕れと仰渡されければ後家

(37オ)「しはらく思案して申上げるは御意の通り若きもの後見仕へく存候得共継子継母の間互に快からすかへつて修羅の種先立れし靈魂も氣のどくたるへしとそんし奉る此上は私髪をもおろし衣を着しなき跡を心静に弔ひ申へし覚悟に存し詰候然ば死人朝夕秘藏の脇さし老腰御座候是を永き形見と存し身を放さす一蓮託生の音しに仕たく存し奉り候御慈悲に此一腰相渡し申やうに仰付られ被下候へと願ひければ此儀聞召分られ後家の望の通り脇差を遣し後家他所へ罷出跡式不殘惣領の何某獨に極り何れも悦び御前を罷立けるとかや(37ウ)」

評にいわく大欲の後家継子をうるさく家を追出し跡にて我まゝに手代と心を合せ幼少なる甥を呼寄名代として有金家屋敷取らん工夫し元より惣領実躰なれば何共偽べきやうなければ不孝なりと難題を申かけけれ共奉行理非を分明にして此工みも埒明ねは一生継子と白眼合て短き浮世に苦しみを見てより此家屋敷に念をきり死人常く持佛堂に向ひ看勤の折から朝夕いたゞき此劍の威徳より今七拾まで命をたちゆるりと後世をも祈り奉れと馳走答拜せられし錦の袋に入たる脇さしなれば(38オ)「是此家の第一宝物と覚ゆれば百両貳百両のものは有へしと女心に是を思ひおとなしくも此一腰を受取賣拂てしき金として他所へ縁付へしと分別を窮め

られしとかやされとも是は大なる後家のはまり元此脇差は奈良物にて親父若き時祭見物の折から酒に酔紛に口論して兎角云つのり此脇ざしにて相手只一打に切付しかおとり上り澁り皮もむけす其内に扱入て双方疵付かぬ喧嘩相濟けるとかや依て酒の酔さめて思へは此脇差切れものならは人の命をあやまり我身も今まてはなかかるまし(38ウ)なまくら物ゆへ怪我もなし是壽命の守神なりとて朝夕秘藏せしとかや

亦評に曰燕は少き鳥なれとも我妻より外は式度妻をもたぬよし和漢詩哥にもおほく言ならわせり人後妻をむかへてよりまゝは惣領を惡み国家の乱れしためし多しとかや

#### 明智旅人を殺し金を取る宿を顕す事 (八の五)

むかし都の邊に商人金子を百両あまり持来り定宿なれば心安く金子を亭主に預置爰に滞留せし内に煩ひ相果ければ此よし旅人の国へ申遣はし少し買求め置たるを送遣しけるに此商人の弟来て(39オ)「言やうは金子百両余持来れば此買ものいたされても余程残り有へし我等に相渡さるへしといふ亭主此方へは金三拾両はかり持参いたされたりと言って互ひに争ひ止ねは此事奉行へ訴けるに双方召出され詮義のうへ煩の様子御聞遊され醫者にても懸たるやと御意に宿の亭主

申上しは此商人大酒にてそのうへ大食いたされ食傷にて急に取詰申されしゆへ醫師にもはか／＼しく見せ申さすと答へければ奉行大にしからせ給ひ汝定宿しなから何とて死する程の病人を醫師にもかけず疎畧にはいたし申けるそ殊に百両余持参致せし金子を夫程は<sup>(39ウ)</sup>持来らさるといふ定て汝毒を以て此商人を殺したるへし其死たる時分に此方へ訴へ儉使をは請さるそと仰られ所のものを召出され此ものゝ身上むきを御尋被成しに貧なるくらし朝夕五人かなしき渡世なりと申遣は則其ものゝ宿なり人を遣し内證御吟味なされしに果して金子五拾両ありしければ此金の出所を段々御せんき被成ければ拷問に及び商人煩ひしを幸ひに酒をすゝめ肴のとくをあたへ殺したるよし白状して終に御仕置に逢ひけり宿の家財はのこらす弟に下されけるとかや

評にいわく奉行の智明らか也年月心安く定<sup>(40オ)</sup>宿として来る商人なれとも此度は金子百両余持参せしに欲心おこりて元より貧なる暮しよりかゝる悪事をたくみけれとも顯れける因果の程こそ不思議なれ所のもの身上向御尋のうへ家の内御吟味なされし御智のほと誠に凡夫の及はさる御計と諸人申けるとかや

亦評に曰旅客金をいたきて他郷へ遠く獨行する事あやうき事なりたま／＼年来馴染し駅亭主人なんそ虎狼にあらさる事をしらんおそるへし／＼

#### 無実を通る即座の分別の事

(40ウ) (八の六)

むかし都の町に有徳なる町人ありしか跡式をは弟にゆつりいまた若きに隠居して町内のうらにかり宅し心易くくらしけるに其隣きさみたはこや商人にて世を渡る人なりしか女房廿三四歳の頃にて器量のうつくしかりけるか隣の隠居と心易し出入しけるにある時亭主外より帰り女房をしはりてちふちやくして申けるは其方何ほとつゝみ隠すともたしかに見届たる事二三度に及ふなりたかひに真実に白状せよと言ければ近所のものともかけつけ集り来りて是はいか成事そとて段々何事と子細を聞くに亭主申けるには<sup>(41オ)</sup>何れもの前面目も御座なき仕合に御座候得共隣の隠居と蜜通したるをたしかに二三度見届け置たり此上は拙者存しよりは是有と高聲上て旬れは女は泪を流しもはや斯て顯れし上は覚悟いたし罷在るといふにそ相借屋のものとも聞て是は隠居不埒なる仕方主しある女をおかすのみかかふに座中騒動するに知らぬ顔こそ不届なりと云て何れも隠居へ来り取扱けるは金子を出しわひ玉へと云へは然らは少々金子を出すへきの間世間沙汰なしにして下さるへしと金子三両より拾両までに取扱ひけれとも亭主中々合点せず終に奉行へ訴へ<sup>(41ウ)</sup>ければ双方召出され御せん<sup>(41ウ)</sup>のうへ隠居申上けるは私全く不儀不仕候得共是も時の災難とあきらめ世間の外聞旁

く世の中のふしやうに金子少々出すへしと申候得は早く金になると思ひ候にや又は私金子出しかねぬ者と見込にや付上り仕候と言へは奉行仰けるはその云わけにては濟かたし元より不義いたさぬといふ慥なる證拠出さる内はその方通れかたしとの御意に隠居しばらく思案して恐ながら恥を申上ねは言わけいたし難く覚へ候ゆへ申上候私覚候若隠居仕りさまくの惡所に金錢を失ひ申のみならず兄弟一家の面々の顔よこし申候事度々御座候ゆへ三<sup>42オ</sup>二年前に存し詰煩悩を切棄申候是に依て世に交り候ても面白からず候ゆへ名跡を弟にゆつり若隠居仕候右の仕合御座候へは不儀可致種は無御座候と申ける其時女房罷出裸切はいたされ候得共根より切れ申さす少し残いかにも煩悩は切棄られしかもとの方に残りたる所御座候ゆへ私を兎や角と云落し今更私に難儀かけられ候見かけと違ひたる性わる法師にて御座候と申を隠居聞て其言を聞かんため右の通りをは申上たり元より私裸切はいたさす汝等夫婦言合てつゝ持とやら云たくみをして拙者をねたり金子を取るへき企と奉存候と申上れば今は<sup>42ウ</sup>夫婦のものも言葉なく差うつむきて居たりけり奉行も隠居か即座の分別にがをおられ玉ひ御は免遊はしけるとかや扱たはこうり夫婦はあらぬたくみをなし金銀をむさほり取らんといたしたる科に十里四方を追放仰付られしとかや

評にいわくたはこ賣夫婦貧なる暮しゆへ由なき事をたくみ金子にて扱ひ金を取らんと思ひける隠居は手前宜敷ゆへ此事は推量して居たりしか外聞も宜しからす少し金子を出し扱ひしけるに大欲なる多葉粉賣にて最早此方のもの也と随分ねたり少しも<sup>43オ</sup>多く金を取らんと思ひしより扱にも聞さりき後は隠居もこらへかね少しも金を出さゝりしよりは是非なく公事とはなりけり是欲ゆへ身を失ふ也と人々申けりとかや

亦評にいわく隠居日頃隣女とみたりに心易くせしゆへ不義せされともかゝる難義に逢たりされは礼記にも男女七歳よりしては同席に座せたとひ兄弟なりとも一旦他へ嫁しぬれば里へ来りたる時も同席に座せず男女物をうけ取渡しするにも手より手へはうつさすなど見へ聖人すら男女の間を戒られたるにかゝる災難あ<sup>43ウ</sup>る事ゆへなるへしとかや

板倉政要後偏卷之八終

(44オ)  
(44ウ)

板倉政要後偏卷之九

目錄

一 養子実子の卒都婆論の事

一 邪智の左繩の事

一 父子の間に養育料を出さしむる事

一 貞女は明智の鏡の事

(45オ)

(45ウ)

## 板倉政要後偏卷之九

### 養子実子の卒都婆論の事

(九の一)

昔し都の町に福左衛門といへる有福なる町人あり夫婦共に剃はつして其名を悟道と改め一子無之故亭主の甥を養子として則名跡を譲り万事実方子の如くいつくしみ替らねは甥も随分孝行をつくし家内むつましく然るに此何かし不計煩付十四五日も打ふして果けり元より甥の跡目たしかにある事なれば身代一式障る事なければ何氣もなく暮しける程なく百ヶ日になりければ親子のものとも<sup>(46オ)</sup>旦那寺へ参詣せしに悟道墓所に思ひ寄さる卒兜婆建ちけるを見て悟道居士供養の卒塔婆にて実子の娘と書付て有るに彼養子不審に思ひ住寺に様子を尋けるに今朝ほと其卒塔婆の施主當寺へ参られ候十六七の女にて則此亡者ためには実子の娘なりと申されしか生れ付花車にてとこやらか御親父に其儘なるに愚僧も落涙に及び候今老人は四十計の女にて此娘のおはのよしにて同道有しか兩人共に殊の外歎きふかく何のあいそふもなく帰られしゆへくわしき事は不承候得とも寺の役な

れは望の通り施主の名を書卒塔婆は供養いたしたる<sup>(46ウ)</sup>と申さるゝを養子此様子を聞親父におゐて実子といふものはなき段は貴僧もよく御存しなるにさよふな紛はしき事申参りしとて行衛も知れぬものゝ不念とそんし候去ながら御寺の事なれば実子の娘と申を実に御聞なされたるも御尤此儀は是まての事拙者が供養いたすへしとて娘の建たる卒塔婆を引抜すて供養の卒塔婆を建替へ不興の躰にて帰りける四五日すきて四十計の男理左衛門五人組方へ来て申は我等女房のめいは當町の誰と申ものゝ実子にて御座候然れとも妾の腹にて候ゆへ各々にも御そんしあるまし左様に候得は福左衛門死去も程へて<sup>(47オ)</sup>後に承り親と子の事なればいかにも死に目に會ぬ事を歎き拙者夫婦も持あまし候此頃も墓所へ卒塔婆を供養いたせし所に養子福兵衛かの娘の建し卒塔婆を抜捨て候此段甚狼藉仁躰にも不似仕方養父の墓へ人の供養とあれば其施主を満足に思はるへき所格別なるいたされやう差當て養父へ志薄く此方への狼藉甚た堪忍なりかたしと此旨仰聞られ心底の程御尋下さるへしと急度断歸りけり名主組中寄合て此事申聞せけるに養子も母の後家も申けるは此以前召仕ひの下女に親父不計手を附懐胎いたしたるよし友たち衆御取持なされ<sup>(47ウ)</sup>金子拾両遣し重て女の言分も望もなし又男子にても女子にても勿論平産いたせしとても末々まで親子の名のりいたすましきといふ慥な

る證文取置候定てその下女か産たる娘にて有るへしといふ名主組中聞て其以前にて金子にて仕切たるは親の名を出すを氣のとくに思ひての事なるへし又此もの実子の娘と名を書き此方へ氣をもたせ卒塔婆を抜するやうにしかけたるものなるをはやまつて抜たるは狼藉に聞ゆるなり少し金子を遣し云なため又手形を書せて取らんといへは此上は兎も角もよろしく頼み奉るといふ其後娘の<sup>(48オ)</sup>伯父の方へ行実子詮義は格別親の追善のために金子三拾両組中より貰ひ遣すへしといへとも中／＼聞入れす強ちに実子といふ訳を立んといふ色々に取もち五拾両までに拵へとも得心せず既に奉行へ訴出けるは私儀悟道か娘にまきれ御座なく母は外戚はらにて只今の後家は若き時は嫉妬ふかく御座候ゆへ悟道ひそかに暇を遣し候此女の義は私しおはにて御座候に付私親子のものを預け置いよく不便に存られ衣類は勿論私生人に随ひおそれなから髪頭まで心を付られ只今御前へ罷出候小袖帯櫛かふかいまで父の寺参り下向の十徳の<sup>(48ウ)</sup>袖に入来りくられ候何とてケ様なる結構なる物を貧しき伯母の手にて調へ申へきや夫に親の死期に合せ申さぬさへ口惜しく御座候処小袖を賣代なし供養仕候卒塔婆を心つよくも引拔捨申され候心底にて日頃を思ひ合せて親父養子に万事遠慮をして実子の私しか行末のことを取おくれ申されしうちに病氣付町内へも沙汰に不及して書置とても有ましく

候たとへ遺言御座候ても養子の兄の心底にてはたとへ遺言御座候ても養子の心底に何の仕方もあるましく存られ候私し身のうへ父にはおくれ貧しき伯母のはこくみを請<sup>(49オ)</sup>実に実子なからも知へき名跡をもとり不申夫のみならず父方の親類ちなみな候此上は何様共御慈悲を奉願との訴状なり又後家と養子申上しは兎角以前に取置申候證文御座候うへはねたりかましく申さぬやうにとて金にて仕切たる手形を出す奉行此手形をつく／＼御覽し此判をおしたる娘か母はと御尋有る是<sup>(49イ)</sup>是れは罷出すと申上る尤なりか様なる證文をいたし置いて重ねて申分はなひはつ然らば此場へ汝か母はよう出ま敷なり去りなから養子の兄もよく聞け此手形のあるからは娘は実子に紛れなし娘でなければ元より親の名のり<sup>(49ウ)</sup>せまいといふ手形を取るへきやうなしさそ親の最期には娘の事心にかゝるへしされと親類家来の前をはかり申出さす果てたるむねのうち思ひやられ不便なりと涙を流して申され先今日は双方ともに罷立つへし重て申上よと養子は不孝ものなりと言葉を残されけり何れも御前を罷立さて福兵衛か後家の方へ名主組中集り相談いたしけるは今日の御意の内に聞し所あり養子は不孝ものとの給ひしは彼娘を引取実の妹とせよとの隠語とて何れも内談をきわめ翌日又母の願書をさし上げるは私儀忤人に使つたなく候間<sup>(50オ)</sup>伯母方より受取私し娘に仕りたきと申上る養子の

福兵衛妹に仕行衛見と、け何方へもかた付たきよし願ひければ名主を召出され此ものゝ身代の儀を御たつね有れば家やしき拾三ヶ所あり金三千両余と申上るを聞し召仰られしは兩人ともに神妙なる心底を御かんし遊はされ願の通り仰付らるゝ也いよく妹にいたし不便を加へよ娘も母兄へ随分と孝行を尽しうやまふべし扱町のもの共を召され娘産たるより母子ともに長々養育せし事なれば養育金として貳百両遣はすへし又姪か方へ向後出入無用たるへし夫も母のゆるしあらは<sup>50ウ</sup>「勝手次第たるへし扱又親子のものごとく」と和熟するまではかたく伯母と不通に致へし兄弟は随分中能して母へ孝行を尽すへしそれこそ亡父への追善なりとこの御意有かたく双方罷立けり

評にいわく実に御慈悲なる御さはきなり養子は不孝ものなりと御意を残させ給ひ又手形いたしたるを御詮儀なされし御下心内證にて取あつかへと仰られぬ計也殊に伯母方へ養たる替りに金子貳百両下され不通にいたすへしと仰付られしはいか様深き御思案と知るへし愚智を以て評するはもつたいなき事なりといへり<sup>(51オ)</sup>亦評にいわく奉行は父母のことくの慈愛にて訴訟人は赤子のことくよくその情を知りて各その争論をやめよく和睦ならしむとかや

### 邪智の左縄の事

(九の二)

昔し都の町に人遣ひ悪しき商人ありけるか一人の下男少しの借り有けるを捕へて打擲せしか悪し所へ枝の中りけん只一打にて死しけるに驚き水なとそゝきけれどもはや甲斐なき今は身の上を悔より外なし漸思ひ出し下人か己れと首をくゝりたるやうに随分と心をつけて掙らへ置下人か親兄弟を呼て見せけるに何れも死骸取付<sup>(51ウ)</sup>てなけきけり主人も不便なる挨拶杯して其身に死ぬる程の思ひや有りつらん是非なき事と明らめ跡を弔ひ遣すへし死骸を取置くためとて鳥目拾五貫文親に遣しけるその時下人か弟思案しけるはたとへ我と首をくゝりたるとても主人の役に其子細をたゝすへきにさはなくして我ゝに大分の鳥目をくれらるゝ事こそ心得ね或は五百文か八百文ならはさもあるへし日頃しはき主人の大方二三ヶ年の給金程錢をくれらるゝ事何にしても不思議なりと親子相談して此事奉行へ訴出けるに則検使遣わされ死人を吟味なされしに是は首くゝりしものにてなし惣して<sup>(52オ)</sup>首くゝりたるものは鼻をたるゝ事夥し此死人曾て左様の躰なし其外不審なる事共多かりければ主人を御前へ召出され段々詮義のうへ白状しければ人を殺したる罪のかれかたく御仕置に逢ひけるとかや

評に曰主人邪智を以て左縄にてしめ殺し下人か己れと相果たる躰に見せけるが実は杖ににて打ち殺し是非な

く繩を以て首くゝりたる躰になしけるとかや此邪智を出たさす右の通りを親弟に包ます語り金子を出し取扱ひたらは主人の命は助けしに悪事にまよひ五拾年の命を失ひける実につゝしむべき道理は<sup>(52ウ)</sup>偽りなり

亦評にいわく小人には仕へがたくよろこばしめやすしといへり人遣ひのあしきは主人たる人のおもひやりなく非道なるゆへなり家来たとへあやまちありとも宥免を加へるべきだけは慈悲をかくれば臣下たるものも其厚恩に感しあやまちをあらため大ひに君のためになる事をなすものなり何ぞ一期の怒に堪す下々を打擲すべきや

父子の間に養育料を出さしむる事 (九の三)

むかし都の町に獨りの職人ありける忤忤拾五才に成<sup>(53オ)</sup>けるか殊の外親に不孝なりけるゆへ上の勘當帳に付ける然るに此親とも次第に年寄渡世なりかたく既にうへに及ひぬ先年勘當せし忤は其後心を持たずして拾四五年の内に持出し身上好くなりぬ二親此よし聞て尋行て勘當をゆるすへし今は年寄て歩行叶ひかたし養ひくれよといへは此忤合点せず一旦親と子との縁を切て他人を養ふべきやうなしとて更にうけす親共余りなん義にせまりて奉行へ出て右の段々をなけきければその時忤を前へ呼出され申されけるは成程以

前に縁を切たれば他人なり去なから其勘當せらるゝ迄廿五年<sup>(53ウ)</sup>の間は親に養われたり今より廿五年か間二親を拾五年半つゝ己れ馳走せられたるやうにして養返せ其跡は又両方ともに訴訟あらは聞へし先他人に養ひの負がある程に急度濟すへし少しにても不孝なる事あらは曲事たるへし家主随分孝行にいたさすへしと仰付られ双方御前を立けり

評に曰愚人に説聞するに正理を以する時は聲に音楽をして聞するやう也聲には仕形にて教ることく上の御意理非明らかなればさしも不孝なる子共理につまり一言も返答にも及はず御前を立けるとなり実に明らかなる仰付ら<sup>(54オ)</sup>れやうかなと皆人申けるとぞ

貞女は明智の鏡の事 (九の四)

むかし都の町に旅商ひする男ありけるか其女房心やさしく形ちよかりし女なればあたりの有徳なる若男心をかけ度云寄といへ共さらに承知せず此女夫の留守に殊の外貧しく暮し朝夕の煙をも立かねけるを能き幸ひとかものは志を運て金銀を合力しける上にていふ様は心をかけし事道ならぬとは云なからも色の習らひにて是非の弁へもなく一旦は兎や角申したれとも最早思ひ切たりといふその時女申けるはいかにこの身<sup>(54ウ)</sup>貧しければとて男ある身として外の男より金を貰し所は不義なり此上は是非もなし其方御心に

したかわんといふ男大ひに悦ひいつの夜はかならず行へしとかたく約速しける斯て約速の日になれば男ひそかに来れは其夜女障りありとて逢わす重て何の夜来り玉へと云へは其夜行しに其夜もさわりあるとて逢す男うらみ腹立て重て何の夜ちかひなくならず合はんと約速しける内に夫田舎より帰りぬ時に女房夫に向ひ久しくたよりなく既にたへに及ひし時我に心をかけし男あつて合力をうけて今日までの命をつなきしなり心に(55オ)随わんと云なため今夜まで偽おきし也何とそ其男の合力請し金子返し玉われといふ夫しはらく思案して此事奉行へ訴出ける口上私儀は田舎あるき仕る商人にて御座候留守の内に私女房去男に金子を借り申候所罷帰り候ても金子催促に参り候わす何とそ此金子返済仕度候間取に來り候様に仰付られ下され候は、有難奉存候との願ひ也いかさま替りたる願ひ也人に金子をかりて濟さぬとて願ふは有に是は借りたる人より催促に預り度との願ひは珍敷事なり然れとも奉行は合点なされしにや己れ主しある女に金子を借したる(55ウ)事不届なりと仰られ則金子は借り手に下され其男は所を追放なされしとなり是男計の不儀にて女に不儀なき事を推量なされけるとかや

評に曰古しへ袈沙衣御前と言しは遠藤武者歳遠にしたわれ夫の源のわたりか身替りに立ちぬ是を評するに夫なくなりなば心にしたかわんと偽りなからも盛遠をす

かす言葉を盛遠は実に思ひければこそわたりか寝所へ忍入りけり其上最早袈裟か靡きたると心得たる上は貞女の道に欠たりとや云わん今また此女智を以て不義なる男の心をす(56オ)かし偽りしは夫の留守に借たる金子強く催促受ましきとの方便なり一日くくと男をたまし一夜も逢わす夫の帰りを待ける心底実に商人の女房にはめづらしき貞女也と皆人かんしけり

亦評にいわく餓死は貞女の道偽て少年の金を得て生を保つは假令実に密通せすといへとも貞女の道にあらざるなりされども下賤のものゝ妻には奇特と賞すべきか

#### 板倉政要後偏卷之九終

(56ウ)

#### 板倉政要後偏卷之十

##### 目録

- 一 宝珠も曇る御捌の事
- 一 過てよく改むる魚商の事
- 一 洛中の巾着切を追ふ事
- 一 御吟味に顕る馴合の借手形の事
- 一 密夫顯す智恵の張紙の事

(57オ)

(57ウ)

## 宝珠も曇る御捌の事

(十の二)

昔し都の町に獨りの法師ありけるか小野篁の夢に授りし珠とて莊嚴うるはしく拵らへ此玉に向て一念さんけし念佛をとなへ目を披き其身の玉に移る容を見れば渡世の障りなき人は正しくうつる又未來に於て罪ある人は其身逆にうつり現世におゐて善惡の二つを見せしめ玉ふ極樂往生すへき人は報恩謝徳の念佛をとなへ罪深くして其身逆さまにうつる人は滅罪生善<sup>(58オ)</sup>の為に念佛怠たる事なかれ彼地極の主しゑんま王の前に立置かれたる淨破利の鏡になぞらへ善惡明照玉と名付て信向のものゝ家ゝに持行てうやゝしく納させける貴賤を論せず老若男女をわかつとつゝ彼の玉に向ひ納しけるはしめ拝みし人も逆さまに移り後に拝みし人も逆さまにうつれと互に外聞あしければふかくくし何も我はかりこそ罪ふかくて逆さまにうつる人は皆真直にうつるならんと心から身を恥しく彼僧に過分の布施を運ひ俄罪の縁を結ぶ角する事京中に時花して二日三日四日は一所に居とまらず所々<sup>(58ウ)</sup>方々へ迎るに五里七里の道をへたてたる在々所々迄駈廻りければ有智無智の老若雲の如く霞とひとしく群集をなして有りかたかりける此事奉行所へ聞へ同心を遣し彼僧を取らへさせ則御前へ玉を召れ御一覽あるに奉行の姿も逆様に見へければ彼僧をつよくいま

しめ玉ひ己れ諸人の心をたふらかし金銀衣服をむさほり取る惣して水晶の丸きにて人の形を見る時は逆さまに移るもの也畜生の形は直正にうつる是に依て狐狸杯人に化たるには是をもつて鏡に見せて糺なり皆寄て形を見よとて近習のものとも見るに何も形逆様に<sup>(59オ)</sup>移て正に移るは常人もなしさらば後生罪なき善人として諸人の引導す法師か形を見せよと彼光明玉の前へ法師を引居へけるに僧の形も逆さまにうつれば今は言葉なしさしうつむいて居ける諸人の見せしめ終に罪に行れけり

評にいわく昔し獨住の僧の庵の前に芭蕉に花のさきたるを優曇花と云はやらせ近国在々所々より聞傳て貴賤群集して是を見る事おひたゞしければ主の僧も自然と福僧になりけるとかやは聞傳へて先より成る幸ひなり今の僧はたくみて諸人を<sup>(59ウ)</sup>たふらかしける天命ゆへ終に奉行の詮義に合けるなりと云へり

亦評に曰佛道は後世を説て今世の救ふの釈迦の大慈悲より立たる法なり外道は邪見にして種々奇妙の妖術をなして佛道を妨げんとすそれをくじかんために釈迦亦勝れたる神通變化の術をなし給へりその費へ賣僧の姦智をたくましくして人をたふらかし迷はすに至るかなしむべし

過てよく改むる魚商の事

(十の二)

昔し都の町に魚商買する活八といへる男ありけり然<sup>(60オ)</sup>るに其女房と近所なる男の同魚商買の鮮吉と密通してもはや四五年の内ふかく隠しける魚賣は毎日七つ起して魚市へ出る留守ことに忍入て不儀をなしけるか或時夫の魚市へ行たるを見て例のことく密夫来りてほしいまゝに姦を行ひけるに夫活八用事ありて道より小戻して内へ入る男おとろき夜着のすそに隠れ忍ひ息をつめ居たるに亭主いふよふ今朝は霜ふかく風も烈しく我は道を行はともかくても寒さをいとはんやうもなし汝は夜着薄し必風を引べしせめて此羽織を上に着よとて抜て女房に念頃に打着せて<sup>(60ウ)</sup>行きぬ女房跡にて扱もいかい虚氣かな己れ寒きは苦にせいてといふ密夫聞て泪を流し夫有る身にして我と不義するさへ世におそろしき女なるにまして夫の深志を弁へす悪言に及ふ心ていいかんしても堪忍なりかたく彼女を引寄只一刀にさし殺し返りぬ其後に夫帰りて是を見付盗人の業か扱も不便の事かなと驚き歎く体を見て猶も密夫心にこたへ悲しく我と此段奉行所へ訴訟し密通の御仕置に逢申度と願ければいさきよく覚悟の心底を奉行も感し有て命を祐け此魚賣か下人となし扱殺されたる女房か死骸と<sup>(61オ)</sup>密夫か名を書付させて諸人に晒し見せしめになし玉ひぬ奉行の慈悲密夫か誠魚賣か情け時の人感心して弥女の死骸に唾吐て返るもの多

かりしと也

評に曰実に悪には移りやすく善心には本つきかたきは人輪のならひなり然るに此密夫も魚うり女房と人知れす四年もなしみけれとも男の情をかんして泪をなしかける折からに女の悪言を聞て日頃の事も今迄の事を悔むのみならず女の心底悪言を惡み一刀にさし殺し夫の歎くを見てこらえ<sup>(61ウ)</sup>かたく不義の段を我れとあらわし訴出たる事実に善にも悪にもつよき男なりと奉行も是を感じて彼密夫の命を祐け魚賣か下人とはなし玉ひぬ実に直なる御捌と皆人申けるとかや亦評に曰人の妻を犯す事大罪なれとも心をあらたむる時は死をまぬかる改るほと善なる事はなきなり

洛中の巾着切を追ふ事

(十の三)

昔し都の近在に古き宮あり此所へ何ものとも知れず夜毎に五六人集り酒などのみて居たりしか<sup>(62オ)</sup>次第に人数ふえて後には式拾人計りに成鍋釜杯を持来り食事などをとゝのへ昼夜住居をしければ神主驚き是を吟味すれば都にはいくわいする巾着切也里人を頼み追出せば村中を焼拂はんとせんと悪口すれは何とも氣つかわしく此事を奉行所へ申上る奉行聞し召れ右訴訟人の内より此巾着切のつらを見知たるものを案内にして相添中にも見知しを兩人召とらへ御吟味

のうへ数年の悪事此度斬罪に仰付られるへけれとも御慈悲を以一往は御助けなさるゝ也此上は汝兩人のもの巾着切仲間頭に申付る間只今まで當所に集り人数生国<sup>(62ウ)</sup>名を委しく書付を以さし上へし其外他国より入来る奴原屯人もおくへからす扱領内他領は申に及はず夜陰の働らき一切停止也白昼にぬかりたる男の巾着切ほとこの事は己れらか手妻仕つるは格別其外追はき辻切等いたすにおゐては兩人のものをはじめ手下のものまで急度御仕置に仰付らるへしと是に依て一棟の長家を建住居すへしとのさばに兩人死助り死出の山より蘇生したる心地にて悦ひ早速明日同類吟味し五拾六人生国実名委細書付を以て差上る是に依て暫らく安堵の思ひをなしける所に十日はかり過て彼頭兩人のもの<sup>(63オ)</sup>を俄に召れ今度御求の鎗長刀脇差御ためし遊はされ候所に折あしく罪人はなし其方手下の内に明後日までの内七人召取出すへし兩人は前方にとたんを拵出たすへしと仰付られるかしこまりて帰り申間五十四人を俄に呼あつめ此事披露するにいつれも肝をけし誰を七人の内に入へしと詮義しても埒明ずとかくはくじ取にして定られ然るべしとはかたらぬ談合すあまり夜更たれは明朝急き相談極むへしとて先其夜は各退散しけるか其夜五十四人何国ともなく逃ちりける斯て兩人の頭も云わけならずとは是も行方<sup>(63ウ)</sup>なく逃うせけるとかや

評に曰小盗も黨を結び衆を集れば終には天下の害をなすおそるへし此盗人とももの科を御ゆるし近在の明地に小屋など立下され兩人の頭に諸事吟味いたさせ追はき辻切かたく仕るましき扨と心をゆるさせ其後七人をためしものと仰出されしは御尤なる御智也是よりしてか程都に多き巾ちやく切り一人もなく諸人安堵の思ひをなしけるとかや

#### 御吟味に頭る馴合の借手形の事

(十の四)

むかし都の町に慈悲深き佛性なる家持ありあだ<sup>(64オ)</sup>名を佛直兵衛といへる有り然るに此ものの借屋の中に近頃わづかに八畳敷の店をかりて住する万八といへるもの近頃篇笠やに金借業右衛門銀三貫目かし有るよし家主へ届け近日御願ひ罷出るよし催促いたす是に依て家主篇笠やを呼て吟味するに借りたるに紛なけれども此もの今の身上にて銀十匁の才覚もなりかたく相見へければ佛性なる家主なしみなきたなこなれとも町中へ此事知らするも氣のとくに思ひ内證にて家主立かへ此銀四分にて扱ひ銀一貫目出すへしといへとも借し方中く合点せず終に御前沙汰となり双方罷出けるに<sup>(64ウ)</sup>奉行聞しめし兩人のものとも呼出され先方く仰られしは汝篇笠やを何ヶ年ほといたす又家内のもの幾人くらすその御意に篇笠商買仕る事十五年程に罷成申候

家内は段々不仕合にて拾年此方親子四人口漸々其日の口過仕るよし申上る其時上の仰には又此銀を借りたるは何年になると御尋に四年以前に借りたるよし申上る則借手形をさし上げる奉行しはらく御思案有り仰られしは其方数年仕似せたる家職のうへ銀三貫目入て下直なる賣もの買込四人渡世いたし兼る事是不審の第一なり凡金を借すもの家質を<sup>(65オ)</sup>

はしめ代物か商買に目當あつて貸し借りいたす事世の常なり然るに借屋七八畳の小店かりて親子四人一日暮に過る程のものに何をして目當に三貫目の銀をかしけるそ是不審の式つ也若し日頃念頃にて合力の心にて借たるならば催促はすましき是不審第三也不頼母しき義也是三つの不也わつか四年の間に三貫目の銀子なす事ならぬやうに遣ひはたせし是四の不審なり其上此手形の墨色年へたる筆跡にてあらす書したゝめて十日にはすきさる筆跡に相見へる是不審の五つ也然れば水に入ためすに及す段々不都合の<sup>(65ウ)</sup>儀なり是皆家主律義なるを見とゞけ己れら馴合て借りもせぬ銀子を借りたると手形を拵らへ家主に銀子出させへき工と見へたり家主は正直にして是を実と思ひ七八畳の小店の宿代いまた二三ヶ月も及さるなしみなきもの難義を思ひやり一貫目の銀子をゆいしよなき店かりのものに合力して扱へといふほと心難き分限のものを見立て借宅仕る相手と密談してかゝる事を工み公義に仕らん急度付届せは下にて扱んも

強訴へ町中出入の物入を算用して兎角内證にて相濟すやうに取持をこしらへ扱せ兩人し<sup>(66オ)</sup>て分取にすへき工みなるへし急度牢舎して拷問し證義すへしとの御意に兩人おとろき白状しければ御仕置に仰付らるへけれども白状の上は御慈悲を以て一往御助け遊はされ所を追ひはらはれけりとなり

評にいわく愚直の人一旦奸佞の欺を得るといへとも天道の加護ある也分ての御詮義馴合たるものとも一言の申わけいたすへきやうなく終に白状しけるならんしかしケ様に家主律義なるを能しろし召れし事不審なり但し上にも御存しあるほと佛性の家主や<sup>(66ウ)</sup>らん此事いふかしく思われける

#### 密夫顕す智恵の張紙の事

(十の五)

むかし都の町に糸屋をしける名取の女の名取二皮目の小けんとてさなから名たかき遊女の風流を学ひ紅粉青娥のよそほひをつくり出たちけるは観る人上下をいはす心をまとはさすといふ事なし然るに此女なさけ心は離て欲に目の見へぬ浪人を男に持ける子細は此人其以前は歴々の武士にて一生のくらし程はたくわへ有て楽しみをしける都東寺の片かけに借座敷して心任せに月日を重ねし内に有人物かたり彼女のうるはしき事傳へ<sup>(67オ)</sup>聞て金銀にてなる事ならはと

頼みしに小さん合点して夫婦となりけるか五三年は萬有に  
任せ栄花にくらせしか此女日夜の奢りゆへ程なく内證薄く  
なりてことさら浪人眼つふれて盲目となりしかは今は楽し  
みもならねは男につらく當て暇をとるへき仕掛の折ふし心  
やすく来りし近所の町人の若き美男にて手前宜しき友あり  
此男に心を移ししのひくゝに契り今は誠の男うるさく作病  
を發し暇状さいそくし終に思ふさまに去状を取り其身未た  
十日も立ぬに彼男の方へ仲人なしに行て世間をはゝかる事  
もなし外の<sup>(67ウ)</sup>もの見てさへ此女をにくめはましてや定  
て男の身ては堪忍ならぬ所打はたす程にも思ひしか目は見  
へすことに暇やりての事なれば死後にも世の沙汰になりゆ  
く事も口惜し夫ならに事すみける折ふし是さへ無念に思ひ  
けるに有夜門の戸に張紙して此浪人町内に置くゝに於ては  
いつによらす町中を切たて一人も命の種あるへからすと書  
記しける時に此浪人申やうは我事は身にかゝり多き事なん  
きも苦しからず然し何ゆへかゝる恨をうけ候や覚へなく候  
へとも各へ難義懸るも迷惑なればとてこゝを立のくべしと  
いふ何れも此浪人をあわれみ此<sup>(68オ)</sup>義はさたなしに談合  
して今までの通り其まゝこゝに居らるゝやうに申渡せば御  
心入の段身にあまり忝し然しこのまゝにては置かたし何と  
そ町中に別条なきやうにと右の段々御前へ申上ければ何に  
ても思ひ當る事はなきかと御尋有し時なにも心かゝりなる

事は御座なく候へとも私此ほとまての妻女兼ては存もよら  
ざる病氣と申出し俄に暇を乞申候是まての縁と存し願の通  
りに暇とらせ申候所に夫より七日目に近所へ縁付申候此男  
右より別して心易きものに候か其後は私方へ参りかね申候  
是より外に何にても思ひ當り御座なく候段<sup>(68ウ)</sup>申上るや  
うす聞し召され其夫婦召出され此儀は密通に極たる女は大  
悪人也又男も日頃知合たる中ならはその妻新に再縁せんと  
いふとも世間の義理を思はゝ取結ふましき道なり男の手に  
罷在時より相馴たるに紛なし有のまゝに申に於ては拷問に  
かけましと女に仰出されし時にはなる男の状を付てとやか  
ふと謂れしにと申上る己れ世の仕置ものなれと一段いとま  
の状を取ての上なれば命はゆるし女は鼻をそき男は元とゝ  
りを拂ひ京都邊は追放と仰付させられ其後此浪人を御前へ  
召され此度の張紙は其方妻を密夫の詮義の為に<sup>(69オ)</sup>其方  
かはりしと見へたり角なふてはならぬ所と御褒の御意有か  
たく御見違ひなかりし御眼力を感じけるとそ

評にいわく此浪人妻を奪れ町人と打果すも口をしく又  
其場に置ても無念に思へと密夫といふ證拠もなし首尾  
よくいとまとらせしゆへなればすへきやうなく暮せし  
か張紙の智恵を出し本望を達しけるを誰知るものもな  
かりしに上の御眼力の見とをしなる事が折けるとか  
や

亦評にいわく淫婦鼻きられても生をむさ<sup>(69ウ)</sup>ほるに  
義をしらす恥をしらす憎むへきの甚敷ならずや

板倉政要後偏卷之十終

(70オ)

(70ウ)

板倉政要後偏卷之十一

目錄

- 一 作龔は後家の智恵の事
- 一 掘出しの壺は欲の入物の事
- 一 無実を受ける夢咄しの事
- 一 戯場の趣向の事
- 一 三味線にて人殺の隠宅を察せられし事

(71オ)

(71ウ)

板倉政要後偏卷之十一

作龔は後家の智恵の事

(十一の二)

昔し都の町に質酒の両見世を出して暮しける商人あり家榮  
るに随ひて召仕も数多有中に物縫に置し女風俗の花車に見  
ゆるか何の頃よりか青梅を好み次第に腹大きく惣躰に疑け  
れは内義吟味し出し男は何かなるものとさま／＼問へと  
もふかく隠して申さぬ事を憎み兎角家の作法とて受人の元

へ返しける夫より一年余りも過て亭主やまひ心にて打伏け  
る皆／＼聲をあけて呼返せとはや<sup>(72オ)</sup>息絶て詮方なくし  
未た子壺人もなく跡に残る内義別してなけき深く然し此人  
関東の人にて京には親類もなければやう／＼女房の一類集  
り野邊に送る用意するとき彼物縫の女乳呑子を抱て走來り  
此跡取は此子なり旦那の御手懸られて平産せし事まきれな  
し此首尾手代の何かしたしかに存られしと無常の内ともい  
わすわめく時手代罷出此方は夢にも知らぬ事と申せは此方  
は此程も旦那より此子養金とて持て來らぬかねていふ我等  
らは其方かかほさへ知らすといふ此女手代にしかみ付如何  
にも東西弁へぬ子なれば<sup>(72ウ)</sup>とて己か親方の筋目なるに  
内證知ながら今又知らぬといふは天のはつもあるへしと顔  
色替へて泣かゝれば葬礼出立の男迷惑して死人を押ての歎  
きの中の訴訟事右の段々御前へ申上しにあの悴は主人か子  
にてあるか真直に偽なく申せと御詮義の時旦那の儀ながら  
内證の事は存し申さす彼女の親元へ主人申付毎月晦日に金  
子壺両壺歩つゝ持参候より外は何の子細も存し奉らす候と  
申上る此訳なきに毎月金子遣すべき故なし本妻穿さくの時  
主人の義なれば名を隠し我はかりの科になる宿へ帰るも壺  
通りは聞へたり是は主人の子にして先祖の<sup>(73オ)</sup>名跡を継  
せよ夫れか母は乳母となり我子ながら主人にして是を守り  
そたつへし後家は其子か母になり勝手次第末／＼隠居仕る

へし金銀財宝は一つ町中毎年立合勘定きゝて取らせ手代に  
商賈の義相さはかせ忤十五才に罷成時是を相すますへし万  
事は後家か心任せに仕るへし後日にあの忤<sup>ニ</sup>付疑しき親な  
と相知るにおゐては何時にても後家申出へし急き死人はと  
り置と仰付られその子跡目取の礼義にして野邊の道を仕舞  
けるか連合別れかなしき中にもその後家は下女か子の事疑  
けるは年月二人か中に子のなき事をなけき<sup>ヲウ</sup>夫婦合点  
つくにて幾人か妾を置しに是等にも終に願の叶わさるに幸  
ひかく有事をかくし玉ふゆへなしとはより心とけていつと  
なく作龔になつて浮世をひまになし佛棚の勤はかりに月日  
を重さね随分人の氣の付さるやうに仕掛し程なく其年も暮  
て明れは春の彼岸に當りなき人祥月とて一家のこらす旦那  
寺へ参り香花を手向石塔に立より皆く拝しける中にも後  
家は一入昔しをおもひ出し泪を流し彼子か手をととりて我か  
とゝ様は此石になられ玉ふなり能く水を参らせよと有し  
時子の母親心おかしく本のとゝ様は鼻の先<sup>ヲオ</sup>に黒羽織  
着て未だ此世に達者にてこさる金な龔か何をいふそ是も知  
らぬか佛じやと手代と顔を見合せける後家は是をきゝすま  
し宿へ帰り明日御前へ罷出て私財宝にさして望は御座なく  
候得とも筋なきものを後継に仕ると草葉のかけなる連合の  
所存彼心口惜く奉存と段々申上る則手代と忤か母召出され  
既に裁許になりて夫なる女何とて手代を子の親とは申ける

昨日石塔の前にてたしかに聞届ての申分と御尋なされし時  
手代も女も口をそろへ是は何をかきかれて跡方もなき偽を  
申上候是は一家中を内談にて<sup>ヲウ</sup>私へ難義を申かけ金銀  
にいたすべき願と存しられ候其子細は後家事去年四五月頃  
より不通に耳聞へす方くの神佛へ立願かけさまく仕れ  
とも其甲斐もなしよし筆談に申こと家内町中にかくれ御座  
なく候耳か俄に聞へ申から御詮義下さるへしと申上る時後  
家打笑ひ何かにしても兩人か心底合点不参して由なき罪を  
作龔仕ると去年よりの事とも一つく申上れば手代も女も  
赤面して兎角の返答もなければいよく手代か忤にまされ  
なければ御詮儀の上にて兩人ともに御仕置を仰出されける  
時後家申上るは夫の経養に命の義を願ひ<sup>ヲオ</sup>奉れは一命  
は御助けなされ五条の橋にすり鉢をかつき摺古木をもたせ  
兩人なから三日さらし江戸京大坂三ヶの津を追放なされて  
忤は女の親に下され末くは出家に致すへきと仰渡されけ  
るとかや

評にいわく後家龔となりて老年余り心を付し夫のなに  
様さる事を知る実に智ある女なり始より女と手代なれ  
合たるとは心付けれとも其時此儀を申上る時は嫉妬か  
ましく思はれん事をいとひて何となく月日を追りぬ奉  
行も手代か心底の疑しく思し召けれとも葬礼の砌なれ  
は御詮義なかりしとかや<sup>ヲウ</sup>実は後家利發なるを御

覽し追て子の親知るゝ時何時にても早速罷出へしと仰渡さる後家の智を知ろし召さる御眼力の程有かたしと謂けると也

掘出しの壺は欲の入物の事

(十一の二)

昔し都の町に三間口の賣家あり同く町に年久しく借屋住居しけるもの此家を求め移りけるに井戸の遠くにこまり幸ひ表に明地あるをかりて井戸を掘らせけるか水筋を吟味せんとて鶉の羽をまきあらゝ必定其羽に朝露深くふくむ所は清水也と古人の傳へに任せ所を改め濟して<sup>(76オ)</sup>掘かけ上土四尺はかり上る時鋤の刃にさわることのあり何そと見れば古き壺の口を石灰にて詰りて木札にて印形有と見へて年号は消けるか辰十月二日はを埋むと計見へたり井戸掘是はといさみて金子を掘出したまた我等にも大分御祝を玉われ此やうな事には昔よりためしもこさると掘あけもせず先より身勝手を申せは掘主聞てたまれ褒美はとらすへし先其壺に此方へといふ所へ地主来り此方の地より掘出したる壺なれば自由にはなさせしといふ借りたる地より掘出せし壺此方のものと此論止事なしはや世間に沙汰して金を掘出<sup>(76ウ)</sup>しけると見物集り町のものとも立合中ゝ下にて消かたく右の次第を繪圖に作て井戸には余多番を付置町中御前へ罷出段々を申上れば奉行聞し召以前此所に茶の湯者の住居せ

しやとの御尋ありし時年寄罷出て御意の通りかくれもなき茶の湯数寄何某と申もの罷在しかこれは十五年以前に頓死仕り此跡孫請取此時に賣渡し東国へ下り候よし申上る奉行笑わせ玉ひ其壺別の事あるまし前の地主のうつみ置て新らしきを古ふる為か又は油氣を抜事なるへし此壺兩人え取らす也随分と見事に掘出させ汝等か欲の入物にせよと<sup>(76オ)</sup>仰出され皆ゝ罷帰り是を明て見るに中には何もなかりけるとなり

評にいわく此壺茶の湯の壺と御眼力違はさる事實に不思議なり欲に目の見へぬ家主地主は大笑ひとりけるとかや欲に非る兩人の心そ悲し何の事なきゆへ皆人の口にのりけるとかや

無実を受ける夢咄しの事

(十一の三)

昔し都の町に江戸みちする商人あり此ものゝ妻は元御所方の奉公して心さしやさしく流石風義は花の香今に残りて人皆目に掛ける身体輕ものなれば<sup>(77ウ)</sup>女独り留守に置けは氣つかひなれとも渡世は是非なく旅たち折ふしりんき深き男なれば女のしらさるやうに宮鳥の血を取て左の肘に付置ぬ是を虫印しとて其女男に見へぬ内は何ほと洗とも落さるよしなりそれより例のことく遠方へ出行て久しく帰らざるうちに近所に名高き色このみの少年ありて此女に昵て目に

て忍ひ物は謂はすして焦れたるに女も自然と此男の心にかゝりしかある夜忍ひ入て契を込めたと夢見たる互ひに不思議なる縁と心に思ひける折から若きものとも大勢集りたる中にて何の遠慮もなく此夢はなして大笑ひしける<sup>(78オ)</sup>其後夫江戸より帰り心ためしの虫印しを見るに消て跡なきを疑ひ出し我女房の事さまゝ詮儀つよく吟味すれば罪なき身のかなしく留守中の事はすこしも包ましと諸神をせいもんに立かの夢の事まで語り聞せければそれはかくれなく美男弥々氣を廻し世上を聞合すに彼男の夢物かたり彼方に沙汰あればさては兩人が不儀外に知られて其口とめにかくはいひけるそと察し是は一詮義いたすへき所と分別してたとへ夢物語にもせよ男のある女を犯したる風聞堪忍ならすと女も夢に出合たるといふに此分にては不思議はれすこれは<sup>(78ウ)</sup>密通に紛なしと此事御前へ申上げるに双方召出されかきくらす心のやみに迷にき夢現とは世人定よと古今集伊勢物語にあるもかゝる事なるへし是はいかにも不義の定跡なし去なから夫のある女の事をたはむれし取沙汰する事越度なり又女も夢なればとて不義したる咄しは無用の申事なり愚なる男の疑ふましきものならず密通か夢の契りか此二つを糺し其上にて申付へしと我汝らか為に夢か現を定て見すべしとてきんの猪口二つ御出し遊はされ女の指の血両方へしほりこませ本夫の指の血壱つにしほり入させしばら

く御前に置いて御覧なされ<sup>(79オ)</sup>けるに本夫の指の血と女の血と合し交り少年の血は女房の血と交はらさりしかは他淫せざる證據なりと見せられしに本夫はしめて奉行感光を以て疑ひはれ少年も密夫の難をのかれ女も子細なく永く夫に添ひけるとそ

評に曰男女の指の血を合て不義したるや否の證據になるへきにもあらず哥の題にも夢に逢恋といへるはまことに逢とは格別也その道理も弁へさる愚人には時の計策にてかゝる裁許もありしにや

#### 戯場の趣向の事

(79ウ) (十一の四)

昔し都の町静謐にして何の一事めつらしき取さたもなかりし折から五月雨の頃桂川の瀬々を不思議なるもの流れ来りあたらしき長櫃に錠りをおろし其上に白幣をさして置ぬ里人の何がし是を見付て各々呼に來りて是は何とも合点し兼てとかく此まゝにては置れまし先神職の物と見へたれば吉田殿の御家へ尋て見んといへはいや々近道に御前へ申上んと内談極めて持参いたし事かましく子細をこめて持参いたし申上る時に仰出されしは先錠を明て御覧遊はすへきよしにて則ひらき見るに年久しき<sup>シヤレコウベ</sup>曝首五つと女の<sup>(80オ)</sup>黒髪を切て入たり何れもおとろきはいかゝなる事そと不思議なる兒つきせしを何の御詮義もなく此長櫃は獨して見

付たるか又大勢にて見し事かと御尋遊はされし時に是に罷在る何かし一人して見付候段申上る己無用の物を見付其里のものともをさはかせ何もへなんきをかけたる過怠に四条河原へ行て此度桂川を流れし長櫃の噂を淨瑠璃狂言に取組仕る事かたく御禁制のよし芝居中へ急度ふれ渡すへしと仰付何の子細なく相すみけると也是は彼者とも狂言の種に拵へ桂川へ流しけるか彼里人たまされしをはやく御聞付させられ<sup>(80)</sup>外へさわらぬ御さはき長櫃は野寺へやりいかなるものゝ曝首やら知れざるに思ひよらざる弔にあひけるとかや

評にいわく洛中洛外静謐にして何の奇説なく芝居しくみの趣向に尽けるゆへ役者ともかゝる事をたくみて世間の風説となしやがて芝居にてその事を狂言にせんとの事也しを奉行かゝる事迄下情をよく察せられしと人皆感賞しけると也

三味線にて人殺の隠宅を察せられし事(十一の五)  
昔し四条河原のすゝみ例年よりも炎暑甚敷故<sup>(81)</sup>に別し繁昌なりし事あり我も人も暮を急ぎ川原の涼み床にいて昼の汗を水になして川音きゝ楽又外になき面白さ貴賤男女まぢりの酒こと幾万人の付合なれとも少しの言葉とかめもなしはいつれ京都の優美なる風俗こゝろと是を感じけるに東

國の士と北國の武士と喧嘩しいたし片手に血刀を平めかし少し立さわく内に一方は上下三人ともに打れ相手はたしかに五六人と見しか残る人なく手を負て退きけるが其時節何の構なき町人を送<sup>1</sup>まはり立退く足元酒酔のことしと所にありし茶屋とも見届け語りぬ夜明て旅宿<sup>(82)</sup>の亭主申出て打れし方のやうす御聞届遊ばされ穿さくなされけれども知れかたく其日うたれたるものゝ子とも兩人主人に御暇申うけて京着し敵打たき願ひ御訴訟申上る此式人は十九と十六になる若者心はいさめと敵も面は身知らず増して名苗字もしられは無念に存たてまつり候御慈悲に有家を御詮義遊はされ下されなほ本望を達したく御願ひ申上れば心底不便に思召し御詮義なされしは洛中に有ほと<sup>1</sup>の外科に御尋なされけるは六月十一日より此方金瘡の療治仕りたるを今日中に書付出すへし若しかくし置後日に相知るに於ては<sup>(82)</sup>急度曲事たるへしと仰出されけるに其頃一条の邊に金瘡の名醫何某とて外科の上手ありけるか此御觸を聞といなさつそく御前へ罷出申上るは當六月十二日の夜四つ前に百姓の召使ものらしき男花車の紋付し灯挑をともし私宅へ物もふを乞壬生の庄屋よりの使として未だ御近付には御座なく候へとも俄に腫物痛出し難義仕候御無心なから此ものと御同道なされ御見廻頼上るよし申し候ほとに醫師の役と存し薬入を懐中いたし野道へ罷出候所に先つ松陰の所よりのり

物持来り是に召て少しもはやく御こしと申ほとに<sup>(82ウ)</sup>老  
足の助と存し乗移りけるに茂りの笹原より大勢かけ出外よ  
り細引懸てゆくかと思へは南のやうのときも有りさまく  
千鳥欠に道筋覚ぬやうにたゞ夢の如くになつて都をはなれ  
凡三里はかりもゆくと思ふとき皆く足もとしつか也門を  
開く音して夫より奥座敷へはるか行て駕籠の戸を明け出し  
けるに金屏風の光り計目に移り魂は消る心して暫し前後も  
覚へなく現に物をきくやうなる時すさまじき髭男此方へ御  
療治頼むは少し世間をしのぶ御方なされ角は仕る事也かな  
らす氣遣ひに思召なと屏風を引明れは手<sup>(83オ)</sup>負六人彼方  
此方に持たれかゝり取みたしたる風情なりいやとは申され  
ぬ首尾になつて養生のうち廿日計昼夜のともし火わたくし  
に影は見せぬまして家内のやうすも知らせず候大かたにし  
て立申候時は當分の礼なりとて金子拾両くれ申候此事沙  
汰さるゝにおゐては重ねて命を申うける也といふ其おそろ  
しさ無事に帰るを諸天に大願かけ申候時又はしめの乗物に  
乗て夜中に元の野原に乗て帰り夫に氣をこらし相煩とくに  
申上へき事延引仕候と段々御聞き立て申せは其所は山家の  
やうに思はさるか御意の通り町<sup>(83ウ)</sup>家は離れ候子細は諸  
鳥の聲やかましく人倫たへて住家のやうに覺へ候明りまと  
よりかすかに高山見へ候をあれはいかなる山とたつね申せ  
は朝日山と申候夫は宇治にてはあるまし定て北山の日なる

へし其外おもひ寄はなきか南の方と思われ月の影さす隣の  
方に都にまれなる三味線の上手あり上げうたふ一節かに  
たへしはし聞とれ罷在よしを申上る其外廿三日の夜をこめ  
て彼山に群集の音仕るより外に何の心當りも御座なく候よ  
し申上る扱は嵯峨の内なるへしと廿四日の明ほのに人音は  
是愛宕山参詣なるへしと先外科は宿へ御帰し<sup>(84オ)</sup>遊はし  
此事隠密に仕れと仰られ其後京中の上手と名の付ほと三  
味線引ものを召出され汝等の中嵯峨の方へ行て三味せん引  
し事はなきかとの御たつねに菊さきと申座頭罷出て私儀遊  
し嵯峨の浪人衆へ招かれ三味せん引申候此主しは七拾余老  
後のなくさみとて遊はされしかさりと柔かな事なり細も  
音よく今時の哥うたひあれ程の面白きふしを諷ふもの御座  
なく候此程は隣の浪人衆病氣のよしにて是に遠慮なされ久  
しく召よせられすと申上る少し尋る子細ありかならず沙汰  
仕るなど仰あり又私かに嵯峨へ人を<sup>(84ウ)</sup>遣わされやうす  
御尋ね遊はしけるに歴々の御浪人衆五月の始頃より借り座  
敷し玉ひ毎日の御遊興と見へしか六月の中頃より御病氣と  
沙汰して召遣ひの士衆も出し申されす候よしを聞届遊はさ  
れ扱は是に極ると則兩人の若もの召され御知らせ遊はし此  
上なから随分吟味いたし打へしと仰られしを有かたく御前  
より直に西坂へ行忍ひくゝに尋しに六月十一日の夜川原喧  
嘩の相手に紛なし百日あたる日兩人心中を定め召連しもの

は上下五人旅宿に乱入名のりかけて切結び首尾よく残るか  
たなく討取て此段御前へ御訴<sup>(85オ)</sup>申上父の弔をなして本  
国へ帰りける

評に曰知れかたき喧嘩の相手をさま／＼御工夫なされ  
御尋ねあそはしける御知のほと深しと言ん始外科に  
御詮儀あり外科の口にて三味せん引もの御せんき実に  
智ある御さはき兩人の子とも仕合なりけると皆人申し  
けるとなん

板倉政要後偏卷之十一終

(85ウ)

板倉政要後偏卷之十二

目録

- 一 禍を避んとし反て禍におふ事
- 一 智を残す長持の金の事
- 一 邪智は顕る白紙の手形の事
- 一 貞女名にかへて人を救ふ事

(第三冊1オ)

(1ウ)

板倉政要後偏卷之十二

禍を避んとし反て禍にあふ事

(十二の一)

昔し都の町に紙見せ出して未女房も持たす男獨り仕て世渡

を待きたいに手廻り能くなりぬ内儀のなきを幸ひに近所  
の若ものゝ遊び所と也小哥浄留理たゆる事なし頃は極月廿  
日過の事なるに老人の下人は用事有て昼より大津へ遣しお  
そく帰るを待かね時の鐘をかそへけるに九つ過になり世間  
も寝しづまり後門の戸の鳴を家来と思ひ立出て見ればさは  
なふして同町の分限者の一子廿二三なるか酒に<sup>(2オ)</sup>酔て  
うち臥たる風情にて先つ爰に一休して宿へ帰らんと當座帳  
を枕にして正氣のつかぬ酔ふしけるに又今夜もかの里帰り  
かもはや起て宿へ帰りたまへといへとも物いわす暫し有て  
起上り扱も／＼口惜しや小判貳百両取られなからさりと  
世間の外聞宜しからす扱も／＼悪しき仕方といふかと思へ  
は目を見つめ手足ひり／＼と振ひ其まゝ脈はあかりぬ是は  
と驚き氣付をあたへけれども齒を喰しめ水も通らず兎や角  
せし内に時節うつりても近所をおこしかねて亭主獨り身の  
なんき暫しあきれ果無分別から沙汰なしにして家来の帰を  
<sup>(2ウ)</sup>待所に漸／＼戻るを悦ひ初の首尾を語り聞かせ今此  
次第を云どもなか／＼我れを疑ふべし然れば其言分は六ヶ  
敷人の知る事にはあらず此まゝに死骸を捨てくれよと頼め  
は下人同心し是は一段の御分別と其親の門へ捨ける其夜も  
明れば二親のなけき町中寄合吟味をするに夜前に限て行所  
も不知存もよらぬ人の命と何れも是をおしみ右の段々を御  
前へ申上れば此ものにかきり一代物言したる事も御座なく

候遺恨ある人もゆめ／＼存し寄らす候もし金子懷中仕を見  
すまし自然もの取が仕候や其身に少しにても刃物疵は<sup>(3オ)</sup>  
申に不及打疵も御座なく候と親とも何の子細もなく申上れ  
はわれ人としての暮にて嘸／＼なんぎいたすべし先死骸をは  
取置べしと仰付られその後いろ／＼御せんぎあれどもしれ  
がたく紙やも人と打ましわり去とは知れぬ浮世なると七十  
五日迄も謂はずして死損になりける其後は紙屋次第に身廻  
りよく下人下女余多遣ひけるに中にも古よりの召使男いつ  
となく我儘いゝ旦那同前にものを申せは昨今のものとも思  
ふは定て親類にてあのことくいふかと思へは夫れにもあら  
ず世間の人も余りなる人仕ひと是を笑へと親方の件の事を  
頼し<sup>(3ウ)</sup>ゆへ是非なく諸事を堪忍れは猶勝にのつて旦那  
の命の親は拙者なりと云たき事に胸をひやうける知らぬも  
のは唯ひとり男の時奉公せしを今恩にかけて角はいふにと  
計思ひぬ此紙屋借宅を居なりに買求めける彼男此時を見合  
我をも是程の屋敷望のよしを申せば差あたりて迷惑いたし  
内證にて銀式貫目出し侘るに中／＼合点せず此家かれらも  
うすに於ては以前の悪事申出るといふにおそろしく此程買  
求めし家屋敷俄に彼男にゆづり取らせる段申せは町内のも  
の中／＼同心せず尤我かものを呉らるゝ事子細なき事なか  
ら買手吟味<sup>(4オ)</sup>して其方へ買すへ斟酌なるに益てきのふ  
まで下男せしものと同座には並ひかたし殊さら存もよらさ

る譲りところ其段は曾て不構勝手次第町の付合の思ひもよ  
らずと一町の一つにかたまりての申分尤至極に存し男にい  
ろ／＼異見いへとも聞入れずして主人からは譲り受けさせ  
ぬ先例あしやと立腹して既に御前へ罷出ぬ町中申す通り主  
人うつけものにあらず殊に死後にもならずして大分の家屋  
敷下人にゆづる子細又下人の分として此屋敷を是非に貰ひ  
とるべき謂れ兩人あり儘に申べし是に付存る所もありと仰  
出され町との<sup>(4ウ)</sup>出入は外になり是不思議の御詮義つよ  
く様子を申上ねは拷問にきわまり自然の道理に詰り下人身  
服の断申上れば主人は其時の死人手にかけて殺さぬ申訳段  
ゝ御聞に達しければ弥式人の命はとらぬに御全義つまり其  
儀當座に申出す死骸を捨たる科いかにしても遁れかたしと  
兩人ながら牢舎いたしけるとなり町内を穿鑿ありしかは隣  
町に泥十と申博奕打召とられ敵敷吟味ありしにかの少年若  
之助金銀富たるゆへ泥十に勧め込めはくちうちそのうへ彼  
か女房妹の美麗に迷ひ日々来て酒のみたわむれける泥十彼  
もの金式百両懷中にあるを知り毒酒をあたへ<sup>(5オ)</sup>殺して  
その金を奪ひたるよし白状せしかは此博奕打死罪せられ紙  
屋新助は牢舎ゆるされ家来鈍兵衛は追放せられしと也  
評にいわく此紙屋うつけにあらねば臆病ものなり其當  
座此事近所へしらせなば我疑かわれんをおそれ下人を  
頼み捨てけるならん下人は此事主人へ恩にきせて我まゝ

をいふて殊に屋敷まで取らんといふは不届なる悪人なり此男隣町のばくち打にそゝのかされ大に酒酔て貳百両を取りけるとかや此人色好ゆへばくち打の女房の妹の美しきに心<sup>(5ウ)</sup>取られ折ふし行て酒吞けるか此男金持成事を知てさまゝたくして博奕をうたせて貳百両の金夢の内に取られ無念に思ひて頓死しけると見へたり後日に此事知れて紙屋は命助かり下人は追放にあひけるとかや

亦評に曰少年の身をあやまつ飲酒好色博奕奉行慎てこれを戒むべきものなり

### 智を残す長持の金の事

(十二の二)

昔し都の町に尾張屋善兵衛とて利發なる商人あり内證よしと世間の取立違はす世を渡りける持病疝積にてつよく筋骨をいためしか年寄にしたかひ<sup>(6オ)</sup>氣力おとろへければ肆は手代にまかせて隠居して粹翁といへり死に覚悟を極め書置を残し又當年十五になる男子より外子なし此子か母は九年以前に相果て其後呼向へし妻には子もなく継母ながら独の跡取を大切にして万事の仕方孤児に放蕩せよと遺言する事ゝ如在なく実子の如く故父も是を満足して世に思ひ残す事もなく有銀貳百貫目後家一代の遺ひ銀扱又銀十貫目つゝ甲乙なしに手代兩人に取らす也今までの通り此家を見立

申へし此外末ゝの親類中にもかたみわけして旦那寺へ上る銀迄残る所なく書置して未だ息の通ふ内は此<sup>(6ウ)</sup>銀ともを相渡すべしと埒の明たる取置してしたいに命のせまる時一家手代を呼集め我等最期は今日に極る心に覚へあり此時只一言いふのこす事あり悴事當年十五才になれば今日より廿五になるまで十年の内何様の儀にても異見する事無用の殊に女若二つの遊興たとへ何程の事にても必ずとむる事なかれ心まゝに金銀を遣ひ捨させ<sup>(7)</sup>べしさて廿五過て一錢にても遣ふ物ならば其時御前へ申上此家を追出へし言おく事は是までそと段々申渡し終に果にける金つかへとの遺言前代なき事也日頃は利發なる人なりしか死に前に何をか申けるぞと京中此取<sup>(7オ)</sup>沙汰して笑けると也今時の若ひもの吟味してさへ止さるに色狂まして遣へとの遺言此子十八より金遣ひ出せしに誰か異見もなりかたく自然にいふ人あれば御存しの通り親父の言置なりと世間構わす奢て只七年の内<sup>(8)</sup>に心の銀百七拾貫目程勘定たらす何れも迷惑して内證にていろゝ申せと是を聞されは兩人の手代思案に及ばず身代續かざるを見極め右の段ゝ申上げたるは向後金遣ひ止み申やうにと御願を御聞届け遊はされ父か遺言今二三年なれば其通りに随分遣わすべしとの仰に今少しの所にて此銀立ち申さゝる事を御なけき申<sup>(7ウ)</sup>上る其段はたしかに家をつく事子細なるへし手代とも氣遣ひなく商買手廣くいた

すべし悴廿五の以後言置そむくに於ては申来るべし其家を  
追ひはらふへし第一母親に孝をつくせと仰出されしを兩人  
の手代何れも御意合点の参らぬ体に見へけるを御覽じ所の  
沙汰にあへる程の某等か主人是程迄の無分別は申さぬ義な  
りさて悴廿五歳になりしに見せの代物金錢一向になく成し  
かは今はせんかたなく又奉行所へ訴出ければ奉行聞届られ  
町中立合蔵遠慮なく吟味して見るべしとの仰に何れも罷歸  
り蔵を相改めけるに人の<sup>(8オ)</sup>氣の付ぬ方すみを昔長持老  
つあり其蓋に書付置れしは是我等か御影の金佛なり是は拾  
三年忌に明て弔ふへしと有り錠まへきりはなし見るに又一  
つの箱あり此内に金老万両包を置ける皆く是を見届け又  
此段御前へ申上るに其箱其儘悴に相渡すへしと仰付られけ  
る諸人御推量にたかわさる事を感じける悴は金子受取ける  
か御前へ知ての金子なれは一錢も遣わす此家次第に栄へけ  
るとかや

評にいわく此親父古今に珍しき智恵なり此悴たわけに  
見へさるものなれは一致遣ひ盛りには<sup>(8ウ)</sup>金銀をな  
くすへし女若二つ此道に入染ては欲徳を忘れ金銀あり  
たけ遣ひすての上に漸く合点し金のもふけ悪しく事  
を知るものなりされは二百貫目の身代なれは十年に此  
金を遣ひ捨させて残り金にて身代持直さんとの推量案  
のことく十八歳の年より遣ひ出しけるなり是に依て両

人の手代此儀を御願申上げればはや御前へ知れたる金  
遣ひなれは諸人に指さゝれん恥かしくおもひ付自然と  
遣ひとまる時分に又一万両の金子に心勇みいよく商  
買に情出せしゆへ段く此家繁昌<sup>(9オ)</sup>しありしとか  
や御前の推量違はすと此親の智と其頃皆人感しけると  
かや  
亦評にいわく子に遺言して女色男色を専に駭奢にし金  
銀を多く遣ひはたせといへるは古今にめつらしき老人  
の遺言粹翁といひつへし

#### 邪智は顯る白紙の手形の事

(十二之三)

昔し都の町に渡世にかしこき商人ありしか段々手前宜しく  
暮せし時親代より念頃に語りけるものゝ方へ銀子五百貫目  
借して預りけるものゝ手形取置夫より銀子<sup>(マ)</sup>五貫目借して預  
り手形取置夫より年々の断に任せ六年相待其大節季に入用  
とて<sup>(9ウ)</sup>催促しけるに手形持せて御越とあるべし銀子返  
進いたすへしと申せは右の手形箱を明て内見するに是白紙  
となりて不思議はれす数多の證文吟味いたせと元の手形に  
別条なし何とも思案に及ばず俄に此段を借したるもの方へ  
申遣しけるに何分にも手形なしには埒明す其後はいよく  
相すましたるに極て結句借し方の人悪しくさたせられ世上  
の外聞を失ひこゝは堪忍なりかたく銀子の損は格別せめて

我正直を世に知らせたく願ひ有のまゝに書付此段御前へ申上れば則両方召出され先町のものに兩人が身代を御たづね遊はされけるに借し方の<sup>(10オ)</sup>身代財宝かけて八百貫匁とさして相違なく御座候又借り方は三拾貫目計と見及ひの程ありていに申上る然れば此銀子は借り詰に紛なし従ひ手形は白紙になるとても銀は急度相濟すべし己れおそろしき所存より仕置とのなれとも銀相渡せは子細はなしと仰出されし時何共御返答なりかたく銀子相立べし御受合を申上る其後借し方のものを近く召され定て此手形は彼ものか宿より書調へて持参いたしたるかと思ひのありし時仰の通り私しより認参りの印判は覺申候故別条なく存じ受取置しと段く申上る奉行烏賊の墨にて書ときは年へて<sup>(10ウ)</sup>その書消失する物なり重ては眼前にて書せて受とるべしと商買の事まで念頃に仰られ都にもあのことく悪人あり此度の手形は兼て持へものなりと仰られけるとなり

評にいわく奉行先町のものに両方の身代の程を御たつね有事は御智の第一なり借し方身上あしきものならば申かけもすべき御疑もあるへし身上好ゆへ申かけはせぬはづと御推量ある所尤也又手形をこしらへものなりと思しめして事烏賊の墨には粉糊をすりませてかきたるものは三年過れば白紙となると<sup>(11オ)</sup>いふ事本草綱目に見へたり正しく是なりと思し召しければさてこそ

借り方を御しかり遊ばされ彼が氣色御覽ありしに一言の返答いたす事なきゆへに悪事は知れけるとなん亦評に曰烏賊の墨を以人を作り欺く是烏賊の賊たる所以なりしかれとも人賊をなさざる刻は烏賊何そひとり賊をせんやされは烏賊の賊人賊をなすにして烏賊の賊をなすにあらず

#### 貞女名にかへて人を救ふ事

(十二の四)

昔し都の町に手前よろしき職人ありけるか<sup>(11ウ)</sup>不断大酒を好きけるか病となり四十五にして果てにける此人理發にて其身代苦勞し持ためたる財宝を残らす五才の男子と二才の娘に是をゆつりぬ此母親は三拾式にて後家をたて髪を切すて浮世を恐る形となり児の成人を願ひ後夫を求る望たつて佛道に立ん其後ほり屋を止て数多の弟子にも隙を出し諸事親類の差圖に任せ金銀は兩替に預け置き世代は人少にして男子七人召仕なに不足なかりきなる時東山の花見とて一家のこらす出行は門の戸外より走て留守なしにして皆出て其くれ方に帰りけるに奥座敷の方に人かけ見へければ<sup>(12オ)</sup>何れも驚き昼盗人と聲くにとり廻し片すみに追込取らへ見るに南隣の一子いまた十七になる角み前髪の若ものなり出合し町中も手首尾悪しく何とぞ沙汰なしにと談合すれば此息子格別すゝみ出て我こゝに忍ふといふは後家殿合点な

りといへはさてはと各うたかひかゝりて此義何とも言葉なし後家泪を流し去とは毛頭覺もなきなきを申かけられて口惜し自分子といふても恥しからす我不義いたさは世間に知らせず相手もあり此事に於ては身を八つさきにあいても詮義とけすには置まし女も女に依るにと一筋に胸をさため(12ウ)人の異見もさらに聞入れずして御前へ罷出右の段ノ御訴訟申せは其男を召れ後家の密通なるをは文通の證拠いたすべし女の筆跡なき於ては盗人の沙汰のかる所なしと仰られければ互に忍ことに御座候ゆへ度々に火中いたし候よし申上るその分にては己れ咎は遁れし其外何にても印はなきかと重て御たつねありし時男暫し案して肌着の淺黄小袖に三ツ蝶の紋所付しをおそれなからぬきかけて御目にかけ是はあの後家の下着にて御座候風吹の夜の別れに着せて返し候ケ様の事なるに盗人の無実受け申候は扱も是非なき仕合と泪眼に成て(13オ)申上る其風俗見させらるゝに衣装の様子定紋まで替る所なしあの小袖は後家か取らせたる覺あるかと仰られし時後家は実に密通の覺はなれとかくまで深切なる少年を我身の貞女を立ん為ばかりに彼ものを盗賊におとさんは不便なりと頭れ申すは大方ならす因果と存し奉りしはいかにも彼ものと密通仕ると申上る然れは何の子細もなきに後家無用の言訳に数多のものになんきを掛る曲者なれとも是女心也罷立と御意ありて若ものを御覽し己

様子あるべきものなれとも後家密通と申上は子細なしと御意ありし時此男頭を下け今少し言上申上度事後家(13ウ)密通と申上るゝに付全く密通にては御座なく候皆私か悪事を工み申候此儀は若氣にて由なき事をいたし親の金銀大分つかひ捨候を此程吟味いたし勘當仕候を漸く一類中の佗事を頼相濟夫より内證きひしくして次第に不自由に罷成隣の有徳なるを兼て存候ゆへ不計出来心にて盗に入候此小袖も手前にて拵置き時然全義の時身を通る言訳のために計是程までたくみ申候私儀悪人に相極り申候と心底ありのまゝに申上る此段御前へ聞し召され初より角あるへしと思ひしなり先後家か心さし我身を捨て世の恥をかまわす(14オ)密通にして人の命を助る事都廣けれと又有るましき女なり此慈悲心を深く感しさせ給ひ是等は女の鑑なれは少しも曇らぬ心入自今はいよく諸親類後見仕るべし又男の段はいまた年もいかで恐しき工み世の仕置ものなれと後家か志を恥し助かる命を捨て即座に相手の難を申分いたせし事若年ものには神妙に思召され依て極命を御赦免下され京都を御拂遊はされけるとかや

評にいわく此若年もの金銀大分遣ひ捨て悪るものに付合けるゆへおそろしき邪智下着の小袖まで拵て後家と密通の證拠出しけれと(14ウ)奉行はいまた疑しく思召されしに後家は此下着の小袖を見るより今まで密通に

非すと云分たとへ身は八つさきになるともいたすへきと思ひけれと心底に思ひけるは此男我が心をかけしに極りぬ我定紋の小袖こしらへ不斷下着にせしは是也尤我不義はなけれと此ものにほれられたは因果此上は是非もなき仕合也夜は逢ふてやるべしと心底に思ひける女心に情には年いかぬ男殊に日頃我行義正しく故此恋知らせかねていたるならんと思ふより此男不便に成て世の恥をも捨て<sup>(15オ)</sup>密通とは申けるとかや奉行の思召には此女は実に賢なるを此男密通にあらざる盗人となりて殺されん事を悲み我はじをかまわす人の命を救ふ事廣き都にめつらしき賢女なりと此心底を感じ思し召し若ものゝ後家に恋のなきにもあらず日頃心にかゝりけれど後家のかたきにいゝかねていたると也後家密通なりと申さるゝに弥く此後家いとおしくなり日頃の悪事を我れと白状し後家の難を救ひける故其身たすかりし事とも古今ためしまれなる義と諸人打<sup>(15ウ)</sup>より感じけるとなり

亦評にいわく後家は貞女の名にかへて少年の盗賊に落るを救ひ少年は盗賊の刑に就事を恐れず後家をして貞女の名を遂しむ賢なるかな

## 板倉政要後偏卷之十二終

(16オ)

## 板倉政要後偏卷之拾三

## 目録

- 一 欲に一家の恥顯るゝ事
- 一 跡目を論ずる二子の事
- 一 脈にて顯る金盗人の事
- 一 明智悪人を顯す何某の事

(17オ)

(17ウ)

## 板倉政要後偏卷之拾三

## 欲に一家の恥顯るゝ事

(十二の一)

昔し都の町に西の岡屋といふ葉茶を商買のもの有古へ里を出て十三年余り町屋住居をせしか先祖より仕来りし百性を止めての商の道は格別にて年々元手をへらし身代つゝきかね今は商人を止めて式度鎌を手取るべき覚悟きわめて金の才かくなともなりかたく親の譲られし田畑一門に預けおきしを受取べしといふに欲に目の見へぬ百性とも一つになり田地買取申候預らぬといふ<sup>(18オ)</sup>然らば買とりたる證文あるかといへは其方に預け置たる證文かあるかと横を申かゝりければ去りとは夫は盗人といふもの也皆遁れぬ中なれば手形も取らず預しは今後悔なすとも是非なし内證にて

祖父  
|  
嫡子  
/      \  
女子      男子  
|      |      |  
兄ながら      継母也      公事相手  
|      |      |  
此祖父孫娘と      嫡子が為に娘ながら      母の兄ゆへ伯父也  
婚姻して男子      以為に

△か為に甥なから  
伯父也

男子公事相手

祖父の為曾孫なから  
実は子也

(19才の図)

評にいわく奉行両方より伯父く互に論たる内に早速畜生同前のやつはらなれば何れとも理非を分ちかたしや思しけんケ程むさき心底のものともなれば御捌遊ばさる事もうるさく思し召しけるにや実に御發明なる御智のほと感じ奉りける

## 跡目を論する二子の事

(十三の二)

46

忒人乳母取て此子共をそたてさせ名も梅松竹松と呼てはや十三になりけるにまた此母頓死せり定めなき世にかなしきは跡を見立る一類もなく只兩人の乳母とも銘々抱守いたせし子に此跡式を望惣領はつねの論をする事止かたく名主五人組家主の異見も聞して両方より同し願ひの訴訟を出たしける時に此家久しき手代罷出て外に書付を以て言上申けるは此家二つに罷成候得は一子<sup>(20オ)</sup>相傳の名方の別る事財宝よりは歎かわしく奉存と御願を申上れば何にても一人に家を繼せ一人は相應のしき金を付他家へ遣し申度との所存尤に聞し召し分けられ京都に名高き取あげばを召されて二子の事前後何れか惣領にたちけるぞと御尋の時ば申上げるは承るに跡より生れたるを惣領に立て申候子細は胎内にて母にとり付縁の深きゆへなり先に生れ候は其子か後に乳房もその余りを吸ふか故に五臓も少しは大小御座候と詳に申上る此ばか申通り後に生れし竹松を惣領をいたすべしと仰出されし時梅松か乳母合点いたし兼此儀は<sup>(20ウ)</sup>母親の心ありて名をは梅松と呼申候是花の兄と申事御座候ゆへとかく此身代二つに甲乙なく御分下され候は有かたく存し奉るへしとの願ひ言上申御前には手代か申分至極に思し召せと是女の愚智と御ゆるし遊はし然らば諸事真忒つにわけ取らずべし先證文を御尋遊はされしに此家代々日蓮宗にて召仕われの下々までも同じく宗旨のよし申上る然れ

は持佛堂を披き高祖の御影を取て参れとの御意に任せ佛を御前へさし上れば仰けるは諸道具を分る初に兩人の乳母ともの手にかけて此佛を真二つに割て重て罷出へしと公事を残し<sup>(21オ)</sup>て御歸し遊はされしに如何しても後世を頼みし佛を割事のおそろしく兩人ともに身振ひし町中の申事を一圓聞入れざりし女とも無用の論非を悔み家主五人組を頼み手代の願ひの通り竹松に家をつかせ梅松は弟に定め歴々の方へ養子に遣す内談を極め此段御訴訟申上れば御奉行の思召の通りなれば其通りに仰付させられけるとかや

評にいわく乳母とも愚智云て互に論する事止さるは皆これ我そたてあけたる養ひ子を大切に思ふゆへなり然るに跡を二つに分んとは是弟にならん事をいやかりて兩人なから上に<sup>(21ウ)</sup>立ん事を願ひての故也是みな女の愚智のいたす所そこを御吞込遊はされ先佛を二つに割るへしと難題を仰出されしゆへに兩人身をふるわし跡をとりたりとも佛の罰は子共にあたるべしと思ふ故に終に和談いたしけるとかや誠に御發明なる御智の程こそ有かたけれ

#### 脈にて顕る金盗人の事

(十三の三)

昔し都の町に北国むきへ遣す傘を仕込申職人あり大勢弟子を以て次第に勝手宜しく壺屋といへる家名を世間に廣めけ

る日和あしきは此家の仕合と成て日／＼に家繁昌して人知らぬ金持となりぬ<sup>(22オ)</sup>或時雨ふりつゝきたる夜に数多の弟子ともを休ませ此程の骨折とて酒を取よせ何れも心任せに吞せて亭主も一つなるに小哥を諷へは弟子も浄るりかたり夜半頃より枕も定めず皆酔ひ機嫌に成て伏しける内義は常に替らす万に氣を付門の戸を吟味して今宵は他人を入まじと暮方より鍵をかけ置しを見届皆／＼ね入りいつもよりは明けゆく朝もおそく起また亭主目さめは見るに昨日問屋より受取たる五十両の小判戸店の前に置たるが是は見へぬに極りさま／＼詮義してもしねば家主と相談するに此盗人外より入たるにあらず門はしめて裏道は<sup>(22ウ)</sup>なしとかく取りては拾式人の弟子の内なりと町中立合内談にていろ／＼詮義してもしらねは此段書付を以御訴訟申上れは一家のこらす御見分遊はされしに弟子とも御前を恐れ独／＼口上跡先になりて此うち三人まで疑しきものありつよく御せん義つのれは弥身をふるわし又は赤面して御尋遊はす事に御返事も申上す此分にては何とも御全義なりかたく召しめしけるか暫し御思案あり惣して人間の其むまれ付によつてもの事をも驚くものあり又身の大事を引受ても且どふぜぬものあり罪なきものを拷問する事道理にあらず是非にこゝは一思案して<sup>(23オ)</sup>全義をとけんと思しめし御全義の科をかへさせられ仰出されしは日頃其家に出入する醫者を召出

されこの弟子どもが平脈と取合せ不断とやふすの替るものあらは偽なく申上べしとて醫者を一間なる所に隠し置扱拾式人の弟子ともを并て置金盗人此内にあるにより只今拷問して其科を顕すなりと云て兄弟子より次第に老人つゝ奥へ廻せは身に覺なきも是に驚き正氣はなかりき去れとも脈は常に替る事なし其中に随分落付て口上も不断にかわらぬものあり此脈けいきより格別に打さわきしんほう納らぬ所を見付て此段を御前へ申上ければその<sup>(23ウ)</sup>もの強く御詮義ありけるに金の有所を白状申迷惑に及ふとき亭主御前訟申上げるは此ものは私弟子の内にも先妻の甥にて外のものは替り悴同前に仕置末／＼は殊によりて私名跡をも継せ申程に御座候己かものを盗申候同前に御座候御慈悲此科御ゆるし被下候は、其まゝ出家に仕度と御願を言上申上ければ願の通り命を御助被下大勢のものとも難義をかけたる悪人なれば弥／＼坊主になす積りにいたすべしと三ヶの津を追ひはらわれけるとかや

評にいわく誠に慈悲ふかき御奉行此時拾式人の弟子とものこらす拷問に遊ばす程ならは<sup>(24オ)</sup>科なきものを数多難義いたすをあわれみ給ひ御思案の程実にふかき計也是によつて早速悪人しれて科なきものは難を通れて悦ひけるとかや又かほと悪人なれども亭主なけきて命を乞ひけるに早速御承引ありて出家にして追ひは

らひ給ひける御慈悲の浮世と皆人申けるとかや

明智悪人を顕す何某の事

(十三の四)

昔し都の町に西国方より来て五条塩釜町に借宅して古里より連たる男老人は是に臺所を預け年中たゞ居して銀八百匁にて万事しまわるゝ身体是<sup>24ウ</sup>程かるい浮世の楽人は我なり今年五拾に余れは長生してから今廿年心にかゝる親もなく行末を思ふ事もなく不断遊を仕る事にして去とは心易き暮しあり古里より金子貳千八百両持参せしか今の算用なれは貳百年の貯へあり俄に栄花の有様もしらぬは明暮木戸錢いたして芝居見より外なく半年余りも暮して京都のともさのみ面白からぬ様に思ひぬ其相借屋に是も独り住して日を送る男あり何賣買するも見ず洛中の分限なる人の男子達の機嫌をとり世を夢のことく渡り夜を昼となし世界の圖はづれなるもの都なれはこそ人も是を<sup>25オ</sup>ゆるしてける我か竈は稀にもたきたる事なければ火の用心よりは氣遣ひのなき事也其外に何も様子の知れぬ男なり何の頃よりか隣に金子のある事を聞出し様々にして取入心をゆるさせ念ころになし或時六条遊女町へさそひ行歴々衆に引合せ太夫交りの遊興此田舎人大分の金持と語り聞せ利金は月七割にても先借りたがるか若者五人内談して無心を申懸れば此男即座に合点して手前に有合すとて幸利銀に及はす御一人に五百両

つゝ五人に貳千五百両ありきり出して預け手形を受取其上に申渡しけるは此銀子は我一代の渡世の為なれは一ヶ年の入用程五人<sup>25ウ</sup>の方より廻り番にして戻し玉へ其内に拙者相果たらは誰にゆつるものもなければ跡の儀よく弔ひ玉われと少しものこらぬ心底天から降たるやうなる金の借手各々當座の悦ひ末に濟すましき覚悟のもの独もなかりけり田舎人も金を宿におゐて氣遣ひたへて其後は不断何れも參會して先に一夜を明せし事もあり折ふし冬の中頃殊さらさへわたりぬる夜遊に彼の相借屋の男其一座にありしか兼て思し工み此田舎ものさへ殺せは預り金は何もの徳になれは五人の手前より礼金大分に取べしと無用の欲心發りて其人に毒酒をこしらへ酔ひまきれに一盃<sup>26オ</sup>吞せけるこの座にては何の事もなく私宅へ帰ると煩て惣身うこがづして口こもり目はかりきよろくと見廻しければ下人驚き未た息の通ふ内に御前へ罷出此事段々言上申五人の手形を御前へ差上夜前の一座此ものともと申上る其五人の外に同座せしものまで召出され御詮義さまくなれとも本人夢中なれは何とも全義の種なく何をさして御吟味なされかたくしはらく御思案あり御手前醫者を召し出されかゝる時申傳へたる妙藥を吞せ見よとの御意にて俄にこしらへ古き鞍のやぶれ革を墨焼として彼の病人に与へければ<sup>26ウ</sup>腹中に入と毒を吞せたる相手の名を自ら呼といふ事唐土の醫書にある

ゆへ今此不思議を見るなり大事の聞事を何れも耳をすまして聞べしと仰出されし時はと驚くものもあり又何をかと疑ふもの有銘く心く<sup>二</sup>に耳を濟しけるを独々心を付て御覧あるに彼ひとり住の男何とやら氣色違て見へけるを取らへ強く御詮義なされ給ひけるに其身の惡事を一く<sup>二</sup>に白状してければおのれおそろしき惡人なりと終に世の仕置になり病人は都の内の名醫にあふせ付られ療治のこる所なきゆへ終に本復して一生の病身にして<sup>(27オ)</sup>五人のものゝ介抱になりけるとかや

評にいわく此ひとり暮しの男は無益の惡事を工み人の命を取しゆへ天災早速にあたり終に世の仕置ものとなりける此妙藥の事唐土にある事やらなき事やら其時の醫者より外に知るものなし何れ少しのいわくは唐土の本にありけるとかや先は此事疑せやらす御覧ある計と見へたり誠に金ゆへ身を亡ぼし命をもすつるもの世にあまたある事なり此田舎ものよしなき金ゆへに身をすてんとしたりけるとなんまことにつゝしむへき事と<sup>(27ウ)</sup>なりけるとかや

板倉政要後偏卷之拾三終

(28オ)  
(28ウ)

板倉政要後偏卷之拾四

目錄

- 一 影法師に隠されぬ実子の事
- 一 即智名を煙に移す術を顯す事
- 一 黒白兄弟の心入の事

(29オ)  
(29ウ)

板倉政要後偏卷之拾四

影法師に隠されぬ実子の事

(十四の一)

昔し都の町に手前有徳なる材木問屋あり此人式さいの頃より家業にかしこく松は千歳に蔵に納め孫曾孫までも居喰ひにしても此貯へ尽る事あらし此亭主は八拾歳の余まで一子に財宝をも渡さず大節氣の勘定をも自ら算盤はしき去りとは無用の勤め今にも死あらは火車のつかみものなりと世間の人の取沙汰漸く<sup>二</sup>耳に入り珠数を求め御堂参りを始められければ暮く<sup>二</sup>後世をいそかるゝ人皆是を<sup>(30オ)</sup>笑ひけるか悪しき事にあらねは何となく佛心おこりて其後は常精進きなりて以前に替る事天地黒白の違ひなり此時箱入にして置たる千貫目の金子のこらす男子に渡して其身は隠居所を岡崎見立作事は手のもの嵯峨丸太かるひ普請窓蓋を明れは諸山を見渡し老後の思ひ出こゝに極め疾くすてぬ世を今はいくやみ然も連合は廿五年以前離れ独り法師になりても心懸

りはなかりき男子は有徳なれば自由に孝をつくし世の初ものを毎日はこぼせ殊さら御茶の通ひのためやさしき女拾四人付置しに寝間の上げ下しも人出には懸玉はす<sup>(30ウ)</sup>墨衣をきぬ計りの出家かたきになり玉へは召仕のもの共を自ら信心おこり敬ひける内に下女の中にもふとりて其形見くるしき庭はたらきの女のはらなりおかしけになりたるを人／＼尤めければ旦那の御名を立てけり大方ならぬいたつらものと此女を憎みて此事を申出せは夢にも覚へなき事とて下女は此内を追ひ出され宿にて安産をいたせしかしかも男子なり随分大事に守りそたて親子の忌あけて是男子を親方の元へ渡しけるに是にとりあくる人もなし是非に及はす哀しさの余りに此子を抱きながら御前へはしり込て右の段々申上<sup>(31オ)</sup>る是に偽てかの親父召出され色々御詮義なされけれとも少しも身のうへに覚へなきよし申上る然らば明日早朝より双方ともに罷出へしとの御意奉畏何れも早天より相詰ける時に仰出されしは唐土にもかゝるためし有り八十余才のものゝ子には日かけに写して其かけなしもし面かけうつらは親父か子にてあらず又移らぬに於ては親父か子に紛れなしと仰られ白砂に立せて朝日に移し見るに影ほうしは見へさりき今は親父陳しかたく私し世間を恥入包み申候得とも成ほと拙者か悴の覚へ御座候と申上れば其時母親罷出末／＼の願ひを申上る<sup>(31ウ)</sup>其子かならず百日は生さる

もの也若し長命ならは重て申出べしとの御意をうけ何も御前を罷立ちその後親父も我が子に紛れなければ證拠を見て此子に不便をかけ昼夜大事に養育しけるか次第によりて仰出されしに違はす九十七日目に果けるとかや

評にいわく色は思案の外と云ひならわせしは名言なり此親父八十に余り佛道にもとつき寝間の上げおろしも人出にかけさるほと法師なり殊に其ために息子方より女四五人茶のきうしとして付置といへとも夫れには<sup>(32オ)</sup>目も付す中にもあしき飯焚女しかもふとり美目あしくむさき女に手を付られしは藪今喰ふ虫も婦き／＼と皆人云ひけると是思ひの外なり初めより其心あらは中にうつくしきを寝間へ呼びあしきと寝間にて思ひしに不計出来心にて湯上りに背なかしけるを只一度手をつけられしに懐胎しければ老人も我子にはあらしと疑われける奉行のさはき理非分明にして朝日にうつして證拠を見しより疑わしく思ひけるに心はれて此日より百日すぎずに御意少しも相違なく<sup>(32ウ)</sup>九十七日目に果しも実に不思議の御智也と諸人感し奉りけり

#### 即智名を煙に移す術を顯す事

(十四の二)

昔し都の町に有福なる商人あり三条縄手に下屋敷を構へ折ふしの遊所とせり久しく召仕の手代隠者かたきにて人交を

きらへは此やしきを是に預け心任せに暮させけるかいまた  
獨身なれば惣領をそたてしに乳母と一つにして商買の元手  
とらすべしと内意を両方へ聞せしに乳母は合点して兎角は  
奥様の御意次第と申ける手代は一圓同心せずいろ／＼異見  
すれとも此事無用に極めける外の事と<sup>(33オ)</sup>違ひ一生の縁  
組の義なれば押付わざにもなりかたく其意に任て手代は一  
生獨り身の覚悟にて身を定めければ皆人あれも氣楽なりと  
是をうらやみぬ乳母は女心に我を嫌て夫婦にならずと常  
／＼是を恨み手代か身に災難を受しめんと工めとも元より  
律儀ものにて親の日寺参りより外は門へも出す何とも詮方  
つきてかねて小家住居の野良ものを語らひ置けるある時内  
方下屋敷へあそひ何つもよりも面白く思ひ夜に入までの慰  
みきけんよく帰りの時としけきに紛れたるふりして川端  
の妻戸の鍵をはつし道を付て物置の蔵の鍵を<sup>(33ウ)</sup>盗て何  
となく立帰る跡にて手代随分念者なれば諸道具を取置仕舞  
も乱れたる跡なれば中／＼今宵の内には片付かたく有まし  
とり置き夜半時に伏てける乳母は件の鑑をのらもの共に渡  
しその夜に忍ひ入らせかけ物寢道具まで盗取らせ夫／＼に  
は金子をとらせ其の諸道具はかの屋敷守の手代の親里へ遣  
し様子は存せず此方の御子息京よりは是を送られける四五日  
の内爰へ御帰り有なりと申手代の母親何心なく是を預り置  
きぬ其明る日手代驚き盗人の入たるよしを親方へ申来れば

是は勝手を知らぬものゝいたせし事にあらず主人思案して  
内詮義<sup>(34オ)</sup>すれとも知れねば其頃見通しの山伏ありとて  
是も又乳母か仕組をなし内方より亭主へ申出させて此坊主  
に様子を語り聞かせまづ占はせ見けるに此盗人は一家の内  
のものなりと見通す安く申せは亭主の心と叶ひ此上は弥た  
のみ入なり其ものをあらわして給われといへは山伏うけ合  
然らは此家内へ申に及はす外に住居する家来にてその名を  
書付玉はれといふ手代廿五人一の名を書記し是を渡せば夜  
の内に祈禱し證據を見すべし明日此衆中列座ならべし其中  
にて撰み出し申と云て其日は宿へ帰り明る日午の刻に來り  
大勢の手代を<sup>(34ウ)</sup>集め申渡しけるは只今此書付を煙に移  
してあやまりある人は則その名に不動の梵字尊像うつるべ  
しと像をかけ香をたきその煙にかけて見るに忽ちに奇特を  
あらわし屋敷守の手代か名書の上に不動の梵字あり／＼と  
出頭せり扱はとは是にきわめ親方も疑ひ心になりければ手代  
は覺へぬ事に迷惑し是非に此事一吟味いたすへしと思ふ内  
に主人より先手代か親元大津へ俄に人遣わし見るに其盜も  
の荷物とし廻しありしを取戻し見るに其盜もの仕けるは弥  
ぬす人は屋敷守手代に紛なしと重く慎ましめさて山伏の法  
力に何れも横手を打<sup>(35オ)</sup>日頃は正直に見へしか人はしれ  
ぬものと取沙汰せられて屋敷守手代堪忍なりかたく山伏を  
相手に御訴訟申上ければ一家一人ものこらす御前へ召し出

され諸道具親元へ預け置ぬと御聞遊はされ扱は手代はいた  
さぬ事と御思案有て彼山伏を召され今度の行力たんできな  
る事殊勝千萬に思し召さると数く御褒美の上幸ひ此方に  
も左様の詮さくものあり最前のことく釋み出たせと十人名  
書して此内に盗人有と仰られしに山伏迷惑して先御暇を申  
と宿へ帰りよくくしかけをなして重て白砂へ罷出是を煙  
にうつせば其中に一人ありくと<sup>(35ウ)</sup>しるし顯たり御前  
に大にわらひなされ責ても此内には疑敷ものなしと申せは  
少し氣毒なりこの名前はもとより何の子細もなきものとも  
の名なりそれを一人煙に頭わす事甚曲ものなりと是より段  
々御吟味仰付られ乳母に頼まれし様子白状申せば是より乳  
母か悪事并右のらものとも同罪に仰付られけるとなり此山  
伏最期の時にがうりに囁き申置しは此度あらわるゝは百  
年目煙に移して不動の梵字のすわる大事は橙のしほり汁に  
て書しるせは只みれは白紙なれとも火にかゝるとその文字  
明に出頭する也淺ひ事なから是れで大分<sup>(36オ)</sup>御初穂を取  
りたるに天罪にあたりかゝる死をすると言ひけるとかや  
評にいわく大悪人の乳母其身を失ふのみか数多の人を  
殺す事是すこしの恨ゆへなり此おそろしき心入を手代  
もしれはこそ一生添ひ果る妻にはいやかりけん己れか  
心底のあしきは恨みすして由なき人を恨むる事皆これ  
女の愚知より奉行もかくまでせうこ有て無実にしづみ

けるを能は御詮義ありける明智の程ありかたけれ唐に  
老女ありけるに男子はやく死して嬖に養れ居ける彼の  
老<sup>(36ウ)</sup>女思ひけるは我男子に送れて存命たるさへ老  
のはぢなり若しまた姫より跡にのこりて世にあらは弥  
くの恥ならんと思ひ自ら首をくゝりて死しける彼老  
女が娘外に嫁して居けるか我か母を嫁の殺せると思ひ  
て奉行に訴ふ嫁迷惑していろくと申訳しても言分たゝ  
す奉行所の役人皆嫁の殺したるに極めける中に干定国  
といふ人老女嫁の言分をよく聞届老女自ら死したるな  
らんと外の奉行と争ひけれとも大勢との論なれば終に  
大勢の方理に落て嫁は科<sup>(37オ)</sup>なくして無実にしづみ  
けるとかや是より此所三年か間雨降らすして百姓なげ  
く事限りなくかくて奉行かわりければ干定国右の嫁か  
罪なくして死罪に行れたる事を語り訴訟して彼嫁か死  
骸を拾ひ集め作りて色くの佛事をなしければ其日よ  
り雨降り百姓大に悦ひけるとなり此時の奉行も盗とり  
し物とも我か親の元へ預置しと申よりはや手代は盗人  
に極る事を知ろし召れければ手代も無実を通れけると  
かや<sup>(37ウ)</sup>  
亦評にいわくわかよきに人のあしきかあらはこそとい  
へり乳母かゝる悪人ゆへ隠蔵に嫌れたる也性質温順な  
らは何ゆへ人にきはるゝ事あるへき

黑白兄弟の心入の事

(十四の三)

昔し都の町に数代つゞける江文屋和助とて名高き町人あり去れば時節の巡合也にや内證よし不都合になりけるを何とそ取直したく思ひて式人の男子あり兄を順藏弟を鉄藏といひけるをよく教へ表をかざりてふるきに依て大商する体に見せ世間をはりければ人知らぬ財宝あるよし取沙汰するもの<sup>(38オ)</sup>多かりけり又同町に杣屋萬右衛門とて大商人ありそま山支配を承り今をさかりと日／＼に栄ゆる大金持あり娘式人持けるか此親出會の時云へるは某か妹娘縁付頃に罷成あわれ御子息兄弟の内何れなりとも聳にいたしたきよし望みけり男子の親は幸の事に思ひ悦ひて成程拙者の惣領娘に申うくへしと媒人入らずに談合きわめ金子千両の敷金にて縁組の約速<sup>盃</sup>事して別れけり其後結納を送り斯て此嫁いまた向へさる内にむすこの親は病に臥し重かりければ一家大に驚き子供は醫師よ祈禱よと東西にもとめ下人南北に奔り療<sup>38ウ</sup>治心をつくしけれとも終に限有命と見へける頃兄弟のものを枕元へ近付我もはや此世の限りと覚ゆるなり夫に付身代五百貫目の分限と呼われし家なれとも汝等か知ることく実はわづか百貫目ばかりの分限となりたり然れとも世人は左様にも言はざるのよし其うへ有徳なる同町の何某か娘を嫁に取る約速<sup>盃</sup>有れば彼是以て大事の事也かならず

油断すべからず随分心を用ひ手薄を他人に知らせず出情しその内に今一度昔しの花を咲すべし夫に付しばらく方便なればありもせぬ金なれど二男何かしに百五拾貫目の讓状を残すなり相かまへて此金を分る<sup>(39オ)</sup>ほととの出世をすべしと呉／＼云ひ町所の人にも書置を披露して終にむなしくなりにつけり兄弟の歎き遺言の体たう／＼骨髄に通て悲しく跡念頃に営み親の志を継はなき父への孝行そと朝暮心にかけて商買を勤けるか天も父へ孝行強きの志を感じ給ひけるにや程なく銀五拾貫目もふけたり弟か此事を知て忽ち野心を起し遺言状のことく百五拾貫目請取べしといふ兄は大きに驚き沙汰の限りの申条如何なる意趣にてかくはいふそと云ければ弟は兄の言分心得かく此度一かどの銀をもふけ玉ひいつまで我等をは角て捨置き玉ふぞかく<sup>(39ウ)</sup>申出る上は一日も待かたしといふ少しも理非をわけすすでに御役所へ訴へんと云つのりけり又同町の何某方よりはもはや忌中も過ぎ候得は娘を迎へ玉わるべしとせかみけり兄は一方ならぬ事案し煩ひ付て弟か悪心血て血を洗ふ如し云あらわしては世体の疵か知るゝなれば殊さらなき父の恥とちゞに心を捨て分別し俄に舅の方へ行き誠に婚姻の約速<sup>盃</sup>候へとも未呼向へ候はねば其事は二段に致し親代より入魂の間万事相談申しても苦しからずと存じ少し無心に来り候なり故は弟にて候何某か様／＼に申かけ憎き所存なから返つて不便に

候得は何と<sup>(40オ)</sup>そ首尾をつくろひ事の破れざるやうに仕  
たく打明して銀子百貫目御かし玉はるべしと頼みけり彼萬  
右衛門此事を聞て忽ち面色替り出しかけたる酒さかなもそ  
こくに入取るさては是も断りならんと思ふ所に案のこ  
とく何とも只今の御返事はなりかたし此方より考て申べし  
とて返しその翌日使をもつて昨日の銀子の事當分才覚なり  
かたく仍て御用にたち申さす次に其許の縁組も余り延引に  
及候得ば先止にいたすべしとて先方より送りし結納の進物  
をことく帰し婚礼も交約してけり惣領いひかいなく人  
ともしらて<sup>(40ウ)</sup>かやうなる事を頼みかけ却て恥を取たり  
とて後悔すれどもかひなく如何せんと思ふ所に弟の鉄蔵は  
是を聞て弥しきりに遺金を受取らんと乞ひ立ればさまく  
なだむれとも聞分す終に忍び出て御役所へ訴へければやか  
て兄弟を召し出され對決に及ふべしとの仰兄は思ふに扱は  
大事に及けると密に重代の家財を集め方々へ質物に預け金  
をととのへ置て返答に罷出申やう此義は元私不勝手に付て  
ととのへ相延今日に至り候則弟が申上る所重々道理にて御  
座候間金子相渡し申べくよし申上げり御前に此段聞し召し  
然らは只今日通りにて<sup>(41オ)</sup>渡すべしとの御意畏りてした  
め置たる金子白砂ならべさせければしばらく有て仰には  
汝等事一々兼てわれよく知りたり只今其旨兄弟の縁を切べ  
しとの御意見は大になけき御奉行の仰にては候得とも只一

人の弟殊に親有之候もの憐み別して深く候ひしものにて御  
座候得ば一入不便に存候間此儀に於ては御赦免を蒙り度よ  
し申上げり段々神妙の申条さりながら弟と思ふべからず  
親の讐汝か敵なりかたく旧里きるべしとの上意もだしかた  
く是非なく勘當しけり則弟牢舎申付られ金子は關所になり  
にけり夫より五十日<sup>(41ウ)</sup>経て兄を召出され今日弟を追放  
仰付らるゝなり此後又文通にても仕候はゝ急度曲事たるべ  
しとの仰渡され其上に彼召上られたる金子を兄に給はり猶  
しはらく様子ある間其上に他行いたすまじと所の名主家主  
にも此事仰付られ罷立けり其後又数月へて同町の萬右衛門  
を召出され汝は金銀余多持ながら心さもしきもの也其上に  
順蔵か親とかたく約速したる縁組を交約したる段曾て義理  
しらす然らは柚山の支配心元なし人を能く見分さる所大切  
なる御役儀仰付られかたし向後役義めし上られんとて則か  
の兄の順蔵をめし出され柚山の<sup>(42オ)</sup>役義仰付られけり夫  
よりなかく御用聞となつて忒度繁昌の家さかへけり実に隠  
徳あれば陽報ありとて人の見ず知らぬ所をよくつゝしむも  
のは頭れたる善にあふ事明らかにあるためしなりと聞く人  
申あへりけるとかや

評にいわく兄弟の心黒白にして兄は親の遺言をかたく  
まもり何とぞして二度家の栄へし事を昼夜心にかけ情  
を出しければ存しよらぬ金子をもふけたり弟は此心に

替りて親の遺言を疑ひ兄と心を合ひまた金子のあるを  
隠し我に譲り状計をわたし置<sup>42ウ</sup>そこと不断心におも  
ひこれによつて兄か金子もふけたるを幸ひにとり出さ  
んとて悪念をこしけるならん此公事の事具に御奉行の  
御存しありしは此家に入出して内外の事まで心安く能  
く存したる針醫に御奉行へ出入するありけるか先達  
て此醫師此事御咄し申けるよし後日に知る人ありて此  
事申けるとかや

又評にいわく子としてよく父の志を継ぎ家業をつとめ  
弟を愛し是善人といふへしかゝる善人を天何ぞ報ゆる  
に多福を以てせ<sup>43オ</sup>さるへきや孝行の徳たる大なる  
かな

板倉政要後偏卷之拾四終

(43ウ)

板倉政要後偏卷之拾五

目錄

- 一 跡目争ふ兄弟公事の事
- 一 邪智を顕す御眼力の事
- 一 両方寄らぬは埒明す蔵の事
- 一 能書は身の災となる事

板倉政要後偏卷之拾五

跡目争ふ兄弟公事の事

(十五の一)

昔し都の町に人形屋ありからくり人形を細工し上手の名を  
とり和朝には珍しき細工人と皆人云ひけるか不断大酒にお  
ぼれ是より長病となりて相果しか跡に男子二人有りけれと  
十七になりけりか百ヶ日の精進明きて後町中立合見るに書  
置もなし金銀諸道具有物をあらため大方世間の法に沙汰し  
て兄に六分弟に四分と云渡し母親の儀兩人して孝をつくし  
玉へと云へは弟何れもの差圖<sup>45オ</sup>承引いたさす家屋敷に  
限らす万事を半分取るへしといふ夫では兄の甲斐なしとて  
さまゝに申けれども聞入らずして既に御前の裁許になりぬ  
段々御聞届なされ町のものとも差圖尤に思ふなり其方當分  
に取るへきと申子細あらば申せと仰られし時弟申上げるは  
私事末子ながらも惣領なるへき義は御恥しなから母親は元  
召仕のものなりしか懷胎して兄を産しより諸親類取持て本  
妻に直させ後私を出産仕候事紛れなく候然れば末子ながら  
筋目格別に存じ奉り候跡をも継ぎ申べき私儀に御座候ケ様  
なる義とも御武家様にも<sup>45ウ</sup>御例の多き御事と承及候よ  
し申上る殿も聞し召し汝か申所も一通りは聞へしなりさり  
なから其屋敷は此母下女の時より持傳へたるか又近年に求  
めたるかと御尋なされける時町のものとも申上るは成程下

(44ウ)

(44オ)

女の時分よりの家屋敷にて御座候と何れも口を揃へ申上る然らば弟か願の諸色は二つにして渡し家の儀は惣領に名跡を継せ母は兩人して孝行をつくし養ひ申せと仰せけるとかや

評にいわく拾七才になる弟か智恵にてかゝる義を申上て諸色二つにして取ける町のものも憎みけるとかやは此もの兄分有りけるか<sup>(46オ)</sup>不斷公事工みする物にかゝりおりしか此男の添智恵して此公事をいたさせけるとかや実には智有る弟ならばかゝる義は承引せず町の衆のさし圖の通りにいたさは兄弟の挨拶もむつましくあるへきに由なき人に悪事をすゝめられ町中にもうとまれ兄弟中にも是より中あしくなりけるとかや奉行は諸人の氣の付ざる所に御心を付させられて家を惣領に下し置れし御分別の程皆人感しけると也亦評にいわく伯夷叔齊國をゆつりたるにわつかなる家財を貪りて兄弟相訟る事かなしいかな<sup>(46ウ)</sup>

### 邪智を顯す御眼力の事

(十五の二)

昔し都の町に其身一代後世の事を知らず許より佛の名をとなへし事もなく不斷金銀を溜る事のみ心にかけて昼夜欲には目の見へぬ分限なる酒屋ありけるか此人うり懸の事に付人に無理なる悪言を言けるに相手も氣短き男にて一つ二つ

云分の上に切臥せ我も即座に相果ける日頃の心入を叱りて天命の尽とて相續する迄もなく其形のまゝに棺桶に取置千本の三つ鐘を聞は心細く煙になして帰りぬ其子は親と格別佛の道を願ひ神を信じ邪なる事をきらふ正直なる人なりしか殊更此度の<sup>(47オ)</sup>わかれ時節とはいひなから末くは出家ともなるへき志し此母は當座に髪をおろし毎日香花を取てなけき沈み四拾九日の弔らひも念頃にして親子打寄り悲しみ居たる折から三拾計の旅僧来て其うへの名をたつねにわかに入越中の立山より物を音信られしと死人の事でありくと語り此脇差を知るへに我を弔ふべく年月貯へし金銀後世の障りとなれば残らす施すべし今の悲しき以前の欲心後悔なり何とそ佛縁の願ひ我を助けられよと様く哀れなる物語を何れも消る計の思ひをなし兎角御出家様を爰に引止め都の内に菴を<sup>(47ウ)</sup>取立なき人の為に万日を申べし死人願のことく金銀此たび残さじと親子の人思ひ定め旅僧をいろく頼めばこゝにとゝまる事大方に合点し今日は先黒谷へ参詣と旅僧と共に出行し跡にて此事町中聞付其脇さしは亭主最期の時節御前へ御目にかけて則棺に入て送りりし物式度帰るは不思議なり是は此まゝ置れしと此段御前へ申上ければ御聞届なされ亭主相果し後下人下女によらす暇を取らせしものはなきかと御尋被成ける此儀承り三十五日過て幸ひ世間出替り時に罷成り勝手も人少に仕る覺悟に

て六尺式人腰元使の女老人隙を出し申候式人の<sup>(48オ)</sup>六尺  
老人は国元へ罷越し今老人は奉公を相止め同町に借宅仕る  
又下女は親里蒔屋のものにて是へ歸し候と申上れば此坊主  
大方此女の許にあるべし是より直に立こし吟味いたせと仰  
付られければ案内知る若ひものを先に立てその宿に尋行は  
件の法師衣をぬきすて近江鮎の焼からし<sup>(49オ)</sup>せし所へ何れも込  
入女と法師をとらへ御前へつれ出ければ時に奉行女を召れ  
おのれ此脇差は棺桶へ入しを人の氣の付さる時盜取て其後  
あの坊主と馴合ひ妻子のなげくを能く知りて斯のことく工  
みて金銀を大分とるへき心根ならん少しもいつわらす申べ  
しと拷問にして問ふへし<sup>(48ウ)</sup>つよき御詮義に御推量に違  
わすのこらす白状申上ければ主人に悪名をあたへたる曲も  
の其罪かろからすとて式人共に御仕置にあひけるとかや  
評にいわく下女下男三人まで隙を出しけるに中にも此  
女をさして曲者と御心の付所明智也棺の側へ寄るべき  
ものは腰元女なるべし男共は庭のはたらきして棺の近  
所へはよるまじと思召すゆへなり又町のものへ此法師  
の事告知らせしは此家に普代の若ひものありしか智恵  
あるものにて法師の咄しを<sup>(49オ)</sup>一／＼聞居て何とも誠しか  
らすと思へと親子の一心に<sup>(49オ)</sup>誠なりと請居られし  
ゆへなけきの中へさし出れはとて取上らるまじと思ひ  
けるゆへ此事町の年寄に咄しければ何れも打寄談合し

て終に御前へ申上けるとかや此若ものあらずは終に此  
家滅しぬべし実に智は万代の宝なりと皆人いひけると  
なり  
亦評にいわく出家の偽をなして人をあさむく恐るへし  
にくむへし

#### 両方寄らねは埒明す蔵の事

(十五の三)

昔し都の町に古しへは武士なりしか大分に金銀を貯へ奉公  
をやめて町人となり難波の里より<sup>(49ウ)</sup>縁組して此妻式拾  
式年なしみ男子老人七才に成る時此父親相果しか其節女房  
も後家を立る心底を聞定め財宝のこらす親子に書置して男  
子成長なるまでは商買は手代に任せ毎年の勘定は父方母方  
の親類中立合を念頃に頼み置ぬ此家に商買仕込外金子五千  
両有しを父方の親類よりは此子十八になる迄は預り置べし  
といふ又母方の親類よりは此方へと申て互に疑ひ此論下に  
て濟かたく両方御前へ罷出右の段々言上申せば両方申所尤  
至極に思召なり其後金子親類名主五人組其外町の年寄とも  
立合吟味いたし相違なきに於ては<sup>(50オ)</sup>念を入月蔵を納め  
置板戸の錠前は父方の一類として封印を付又江戸の封印は  
母方の一類として付置板戸の錠は母方へ預り土戸の鍵は父  
方へ預りて一子十八に罷成時是を相渡すべし用心の儀は手  
代と共に念を入べしと両方疑ひなき仰渡され有かたく此内

蔵両方よらねば戸前あかざる事を何れも深く感じけるとかや

評に曰五千両といふ金子に両方の親類欲心おこり互に預り度思ひけるは断なり我心には大方五千両の金子二つに割式千五百両つゝ兩人へ御預け有るべきと思ふ所に両方立合<sup>(50ウ)</sup>ねは埒明ぬやうに御思案早速出る事御奉行あそばされ候御智は格別なる事と諸人感じ奉りけるとなり

能書は身の災となる事

(十五の四)

昔し都の町に親は代々打つゝきたる分限者にて金銀に事かゝねは獨身の栄花を極め昼夜色里に入込けるかしかも美男の上<sup>(51オ)</sup>に世の人の藝能一色にても学ひ残せる事なし中にも能筆なり親果して後は弥身を我まゝに持なし金銀水のこたく遣ひ捨て後は諸道具迄も賣果し夫にも此道を止めす初中後獨りの太夫を七年か間買つゝけ<sup>(51オ)</sup>間夫のこたく馴染み遊女も年月の情を忘れず浅間敷なりても心を通わせける或時云ひ合せて此所を盗出んと談合極め折ふし五月雨降りつゝけ<sup>(51オ)</sup>闇の夜鼻をつまむも見へぬくらき夜に悪友たち四五人語らひ女房忍び出るを早桶に抱入て白帷子打かけてまだ宵なから荷ひ出る大門の番のものはを見ながら誰か身の上もみなあれじやいかなる人の祖母やらんと無常を覗しける其夜

太夫が見へぬと詮義して門番に相尋しに今宵にかきりて早桶一つ出たるより外鼠一足出はせぬといふ扱はと轡中を吟味するに葬礼の出所なし此仕かけ<sup>(51ウ)</sup>にて盗出せしに極ると付きくゝの女どもせんさくしても知れかたし文ともを改めけるに兼てその心得して随分取廻しけるに因果は疊の下より名書のなき文一つあり其中に盗出すべき内證ともを書續けたり是を見合せるに彼男か筆跡にうたかひなし是を証拠に名をさして彼ものを召出され此文は其方か書しかと御尋ありしに私か手にはあらずと申上る然らば此文の通り書べしとの御意に任せて筆拍子得たれば格別手筋をちがへて書上る時に仰出されしは此文違ひたれば断りたつなりしかし前くゝとりやりいたせしその方<sup>(52オ)</sup>名のある文と相違するは手を自由に書ゆへなりと前方遣したる文ともとり寄せられ御一覽あるに三品に手ふり違ひければ右の書移したる文を又仰付られ此度は文章計り御讀せ遊はされ書とて御覽あるに筆ゆきは違へて書付上れども文字の移り墨つき少しも違はす是よりいよく御吟味つよく終に此事頭れ此男曲事に極る時は是に組たるともたち共も申上るに此男此女郎獨りに七千両の金子をうしない身体つぶしたる段くゝを申上右に此女郎千五百両にて受出す相談仕り候此金子を我くゝ五人して合力仕り親方手前をもらひ<sup>(52ウ)</sup>度願ひ此ものゝ命を御助け下さるへしと言上申せは上の御目をかすめ

し咎輕からすといへとも汝等か頼母しく願ひにめんじ一命  
御助け五人のものともに被下ける此上は右の五人にて千五  
百両女郎屋へ急度相渡し申べくと御慈悲なる御意に双方罷  
立てるとかや

評にいわく此男筆拍子きゝたるゆへ頼母敷友達ども御  
訴訟申上一命は助けけりはじめより七千両なくせし段  
ゝ申上真直に盗出せし事を白状申上は曲事にはあふま  
じ此度友達あらずんば此女ゆへ身をなくすべし(53才)  
女郎屋も七年か内とり込したる事なれば少しは了簡も  
すへし内ゝは盗出す事を止めて友達に合力を始より請  
て女郎屋と相對してもらひなは金子も是程は出まじ由  
なき悪事ゆへに諸人に面を見知られ其上世間へこのさ  
たはつと知れけるとかや